

火の神の夫—apekamuy・cisekorkamuy・cisekamuy—

北原次郎太

キーワード：アイヌ文化、信仰、inaw(木幣)、apekamuy(火の神)、
cisekorkamuy(家の守護神)、cisekamuy(家屋神)

1. はじめに

本稿では火神の伴侶となる神が地域ごとに異なった顔を見せることを例示し、そのような地域差が生まれた背景について若干の考察をするものである。資料とするのは、1900年代～1950年代に得られた民族誌や写真、博物館に収蔵される民具等である¹。

在来的なアイヌの信仰において、火神はその中心に位置している。20世紀以降、J.バチェラーや金田一京助らによって幌別や沙流川流域の文化が広く紹介された。この地域では火神を年老いた女性と考えており、今日でも火神は老女としてイメージされることが多い。

また、上記の地域では、cisekorkamuy「家を司る神」と呼ばれる木幣が火神の伴侶であるとされる²。アイヌの木幣は、一般に神への捧げ物として用いられ、神事のたびに新しく製作する一回性のものである。ところが、木幣の中には、しばしば人間界にとどまって守護神の役割をするものがある。cisekorkamuyはこうした常在性の木幣の中でもよく知られた存在で、その職能は悪神や災厄を退散させて家族を守護することである(以下、家族神と呼ぶ)。北海道ではほかに白老や千歳、静内、樺太の来知志でも、家族神と火神が夫婦の神とされる。いずれも決まって火神が女性、家族神が男性となっている。

家族神の形状を見ると、白老から静内までの地域では、丸木のまま3方向の外皮を削り起こした「外皮三生短翅」を持つ木幣を用い、宝壇の奥に祭る(図21³、22)。木幣が損壊するなどの凶兆があった場合や、家長が死亡した場合に作り変えるが、基本的には、同じものを祭り続ける。大きな神事のたびに神衣として削りかけ(以下、剥幣)をまとわせるので、年を経るごとに大きくなっていくものである。

同地方には、これと別にcisekorinaw「家の木幣」と呼ばれる木幣がある(図20)。これは、撫った長い削りかけ(以下、撫長翅)を持つ木幣で、大きな神事の際に囲炉裏の上手に立てられるものである。

¹ 民族誌情報として、刊行された文献のほか、更科源蔵のフィールドノート『コタン探訪帖』を参照している。同ノートから引用する場合は、ノートNo.と頁数を示す。博物館資料を参照する場合、館名の略号・収蔵番号を示す。略号は、記→北海道開拓記念館、北→北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、旭→旭川市立博物館、白→アイヌ民族博物館、民→国立民族学博物館、REM→ロシア民族学博物館、サ→サハリン州郷土博物館とする。

² この神には、punkawtono「ハシドイの神」、sopaunkamuy「座頭の神」、sirapuskur「偉大な羽のついた者」など、多くの別名がある。なお、久保寺(1977)のpp42-43に、火神と家族神のまとまった記述があるので参考されたい。

³ 図21は門別の鍋沢元蔵による守護神(89460)。本資料は病魔よけの神だが、形状は家族神と同じなので参考としてあげる。

神事の終盤に炉頭から抜き取られ、宝壇の上に挿し込まれ、家屋の神に捧げられる。

家屋神は家族神とは別の神である。物質にはすべて靈魂が宿っていると考えられており、家屋にも家屋自体の靈がある。cisekorinaw はこの家屋の靈(以下家屋神)に捧げたものだとされる。いっぽう、炉頭に立てることから、千歳の小山田小三郎⁴のように cisekorinaw は火神に捧げたものだとする見方もある。静内の葛野辰次郎は、一度火神に捧げ、神事の終盤に、改めて cisekamuy 「家屋神」に捧げるとしている[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1993 : 145-149]。

このように家屋に関わって 2 つの神が存在し、それぞれに木幣がつくられる。両者は全く別の神、木幣であるが、名前が似ていること、置かれる場所が近いことから、しばしば取り違え・混同が起ることがある⁵。しかし、家屋神は一名 cisekatkemat 「家屋の淑女」とも呼ばれる女神であり、したがって、同じく女神である火神と夫婦ということにはならない。また、家族神は職能に由来して cisekor 「家を司る」という言葉を名に冠するものの、家内守護のために招じられた存在であって、本来的には家屋とは無関係の神である。家族神の木幣は神体そのものだが、家屋神の木幣は奉納物である。火神、家族神、家屋神の関係を表で示すと下のようになる。

	火神・配偶者		家族神・配偶者		家屋神・配偶者	
沙流二風谷	女性	家族神	男性	火神	女性	?
静内葛野	女性	家族神	男性	火神	男女	家屋神
静内森崎	女性	家族神	男性	火神	女性	?

表 1

興味深いのは、火神と家屋神が、同じ cisekorinaw を捧げられるという点である。2 つの神が 1 本の木幣を共有するという現象も珍しいが、それにも増して、夫である家族神ではなく、家屋神とのあいだにこうした関係が結ばれていることに注意しておきたい。

もっとも、こうした相関関係は、アイヌ全体に一般化できるものではない。

例えば釧路、白糠、屈斜路、美幌、網走などの北海道東部から北部にかけての地域では、火神は男女の神で、ともに囲炉裏の中に座しているという。したがって、さきに見たような火神と家族神の夫婦関係は成り立たない(図 38)。また、これらの地域では、cisekorinaw に似た報告例(以下、宝壇の木幣と呼ぶことにする)は多いが、家族神の事例はほとんど見られない。木幣を守護神として祭っていたという記述は散見するものの、家族 1 人につき 1 神を祭るなど、個人の守護神としての性格が感じ

⁴ 故人については敬称をつけないこととする。

⁵ たとえば、大島稔は、各地方の調査結果を総括した中で、家の神についても触れている。ここで「家の守り神」として言及されているものには、家屋神、家族神、cisekorinaw が混在している[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1986 : 153]。

られる⁶。

釧路下雪裡の八重九郎⁷は、makwaekasi または mattarokkamuy と呼ばれる守護神を祭っていた。国立民族学博物館に、mattarokkamuy と思われる、八重の手になる木幣が残されている(民 33417)。形態は撫長翅を持つ木幣である(図 29)。長翅を持つ点は沙流の宝壇の木幣と似ているが、2つの点で大きく異なっている。まず、八重資料は煤による黒ずみが強く、長期間にわたって屋内に安置されていたことがうかがえる。また長翅の部分をしばって束にし、縛り目に剥幣を無数に挿し込んである。剥幣は、古いものと新しいものがあり、一度に付けられたものではないことがわかる。おそらく、先述した沙流川の家族神のように、神事のたびに新しい剥幣を加えて祭っていたのだろう。つまり、本資料は、形態では宝壇の木幣に、祭り方では家族神に似た特徴を持っているということになる。

こうした、常在性の木幣には、屋外で用いるものもある。山中でクマを獲て、一人では運べないようなとき、クマ神の接待役と、肉の見張りを兼ねた木幣を立てる。沙流では、ほとんどの場合に外皮三生短翅を持つ木幣を用いる。いっぽう八重は、こうした場面でも撫長翅を持つ木幣(mattarokkamuy と同じもの)を用いる⁸。以上をまとめると、北海道の沙流の守護神に見られた職能、形態、火神との関係などの特徴は、釧路の例ではどれも一致しないことになる。

火神に対する認識の地方差についてはこれまでにも言及があったが、家族神との関係はほとんど未検討である。このことに注目した研究がなかったのは、上記のような屋内の神々が持つ複雑な相関関係があまり知られていなかった、または注視されていなかったことによるだろう。また、沙流川流域の習慣をアイヌ全体に一般化しがちな、従来の研究傾向に起因しているともいえる。

本稿ではこうした反省にたち、樺太・北海道各地方における家族神・家屋神のあり方、火神との関係を再検討することを試みる。はじめに各地の事例を示し、その後に考察を述べる。

2. 樺太の家族神・家屋神の事例

2-1. 樺太西海岸

《1》樺太西海岸鶴城では、家族神は男女の神である。形態は木幣と木偶の中間のようなものである。また、宝壇の木幣は2本あり、この守護神に捧げたものと考えることができる(図 39)。火神の夫と家屋神の性質は不明である。

鶴城の家族神は、木幣に人面を刻んだ、木偶のような形をとる。男女一対で、屋内に祭られる[更科 1968: 110]。記 89515-1 は、家族神である(図 1)。ヤナギ製。材木は割らずに用い、下端と上端は水平に切断して面取りをほどこす。樹皮はすべて剥き、胴を削って平面を作り(以下、削印)印を刻む(以下、胴印)。上端付近の一方を、やや傾斜をつけるように削って顔面とし、目鼻口を刻む。側頭部か

⁶ 本稿 3-2、3-3 参照。

⁷ なお、八重家は、明治期に釧路市幣舞から移住を強制された経緯があり、八重家の習慣は幣舞付近のものと理解すべきである。

⁸ 本稿 3-3 参照。

ら後頭部にかけて、頭髪のように下から上に削った(以下、↑で表す)削りかけを削りだす。本体に黒マジックで「樺太西海岸ウショロ チセコロセニシテ (オッカイ) 柳川助次郎 作」という書き込みがある⁹。cisekorsenisteh (okkay) 「家を司る守護神(男性)」と解釈できる。

記 89515-2 は、家族神である(図 2)。ヤナギ製。材木は割らずに用い、下端と上端は水平に切断して面取りをほどこす。樹皮はすべて剥き、胴に削印と胴印を刻む。胴印の形状が、男神と異なっている。顔面の作り方も違つており、上端付近の一方に面を削りだして、目鼻口を刻む。頭部の全周に、頭髪のように上から下に削った(以下、↑で表す)削りかけを削りだす。首から下は、男神とほぼ同形である。本体に黒マジックで「樺太西海岸ウショロ チセコロセニシテ (マチネ) 柳川助次郎 作」という書き込みがある。「家を司る守護神(女性)」と解釈できる¹⁰。

同じ形のものが、個人(病人)のためや、集落のため(病魔除け)に作られることがある。nankorope 「顔を持つもの」と呼ばれる集落の守護神は、屋外に立てられ、左右に kuwa 「杖」と呼ばれる副幣や、木製の槍が立てられることがある。このほか、個人の守護神が数例確認できる。いずれも、人面を持ち、さらに胴に横枝を持つ例、左右に付随的な木幣を立てた例もある。記 89516 は、病弱な女性の守護神とされ、形態は記 89515-2 と同じだが、寸法だけがやや小さい。

宝壇の木幣については、記録がない。ただ、更科源蔵が、収集品を撮影した写真¹¹に、家族神と、長翅を持つ木幣を組み合わせて撮影したものがある(図 3)。現存する資料と照合した結果、写真の木幣は、記 89519 と記 89518 であることがわかった。これらの木幣は、家族神に捧げる木幣として作られたものと考えられ¹²、上記の写真は、その配置を再現した場面のようである。

記 89519(図 4)、記 89518(図 5)ともほぼ同形である。上部には、軸の周囲をめぐるように削りだされた↓の短い削りかけ(以下、輪生短翅)が密集している。その下に↑の長い削りかけが垂れている(以下、散長翅)。胴には削印と胴印がある。頭頂を凸形に成型し、糸を通して吊り下げるようになっている。

《2》 西海岸来知志では、家族神は男性であり、火神と夫婦である。守護神の形態は、逆木を使った特殊な木幣である。宝壇の木幣は、家族神に捧げたものかと思われる。家屋神についてはよく分からぬい。

藤山ハルによれば、来知志で祭られていた家族神は cisekorokamuyhenke 「家を司る神翁」、cisekorosenisteh 「家族を司る守護神」、soetohorunkamuy 「上座にいる神」などと呼ばれ、エゾマ

⁹ 「柳川助太郎」の誤りと思われる。ご家族に確認したところ、親戚にも助次郎という人物はいないとのことである。

¹⁰ マチネは、アイヌ語樺太方言の mahne 「女性である」に相当すると考えられる。アイヌ語北海道方言で同じ意味を表す matne は、慣習的に「マチネ」と書かれることが多く、更科もこれに従つたものと思われる。

¹¹ 更科が収集品を撮影した写真がネガの状態で保存されている。これらの写真の一部は、更科の著作に掲載されている。弟子屈町立図書館所蔵。

¹² 来知志および小田寒の項を参照。

ツカシラカバを根ごと掘り起こして逆さにし、宝壇に立てたという。この神は、火神と夫婦であるといわれることから、鶴城のような対の神ではなく、1神だけで祭られていたのだろう【藤村ほか1973a：12】。

管見の限り、実物資料は残っていない。図6は、1948年に来知志で撮影された写真(サS-7)から起こしたものである。屋外の祭壇の中央やや左寄りに立てられていたもので、木の切り株を逆さに立てた姿をしている。藤山のいう家族神は、おそらくこのような形状をしていたのだろう。図のものが祭壇に立てられた理由は分からぬが、家族神だとすれば、何らかの理由で使われなくなり、靈送りをされたものだろう。全体に樹皮を残し、根は一定の長さで切りそろえられている。胴には刻印がある。

家族神には、男女1対の木幣が捧げられるほか、定期的に献酒や食物を口に付けるといった礼拝が行われる¹³。鶴城のような人面は刻まず、刻印を目鼻に見立てて食物を塗りつける。

なお、来知志でも人面を持つ偶像は存在していたらしい。図8は、藤山ハルの近親者である山田藤作が、北海道移住後の1970年頃に製作したものである。収集者の重松和男氏(元南山大学)によれば、これは「カマド神」だといっていたということである。「カマド神」が何を指していたかはなお検討を要するが、家族神のことと言っていたのかもしれない。

形状は鶴城の家族神とよく似ている。おそらく向かって右が男神、左が女神であろう。男神はサクランボ製、女神はニワトコ製である。山田はこれと似た木偶を20点近く残しており、それらの内にはシラカバなど他の樹種も含まれている。男神は胴に削印と胴印を持つ。女神には印がなく、ニワトコの小片をつづった首飾りをしている。男神は、胴のやや上に一本の横枝を持ち、反対側に小さな木幣をさして、両手を広げたような姿になっている。女神は両腕とも木幣である。それぞれ槍と長刀状の木製品を添えられている。これらに付属して剥幣が2点残っているが、おそらくは鶴城の家族神のように像を包んでいたのだろう。

宝壇の木幣についてははつきりした記録がない。文献には、冬季住居の屋根に立てるsoopanawという木幣が見られる【山本1970：40】。来知志の住居内部を写した写真(図7)には、上座隅の梁の辺りに木幣が密集しているのが見える。これらの木幣は、前記の家族神に捧げたものだと考えられる。梁の上などに挿し込むか、吊り下げるものであろう。

2-2. 横太東海岸

《1》東海岸白浦の白川仁太郎は、火神は女性であり、cisekorokamuyと夫婦であると述べている【山本1970：147】。cisekorokamuyが、家族神と家屋神のいずれであるかはわからない。山本が記録し

¹³ 和田(1987(1959))p25および、Ohnuki(1968)p142参照。藤山ハルは主として来知志での生活体験に基づいて証言しているといわれるが、出生地は鶴城よりも北の恵須取である。これらの地域は人の往来が頻繁なこと、藤山は北海道移住後、鶴城出身の柳川助太郎氏に木幣等の製作を依頼していることを考えれば、信仰上の習慣の多くが共通していた可能性が高い。したがって、守護神に対する食物塗布等の慣習は、鶴城付近まで広がりを持っていた可能性がある。

た cisekorokamuy への祈り詞には、家族神を勧招するように読めるところもあるが、家族神の神体のようなものは記録にも見えない。

宝壇の木幣は soopainaw と呼ばれ、年に一度 cisekorokamuy に捧げる。3 本一組で作られ、素材となる樹種の組み合わせには、いくつかパターンがある。山本祐弘は①主：エゾマツ、副：エゾマツ・トドマツ、②全てハンノキ、③全てシラカバの 3 つのパターンを記録している[山本 1970:144-147]。

白川作の soopainaw と思われる木幣の図がある(図 11)。3 本 1 組で用いられ、中央の木幣が主となり、左右にやや小型のものが立つ。中央の木幣は、頭部と胴を別に作っているらしい。頭部は輪生短翅と、撫長翅の房数本を持つ。胴には削印を 2 段刻み、下端は尖らせている。胴の左右に段違いに枝を残し、それぞれの先端は、剥幣を結束していると見られる。

左右に立つ木幣は、中央のものとほぼ同形だが、小型である。頭部、および左右の枝の 3 節所に、剥幣を結束している。図 11 とほぼ同形の資料がサハリン州郷土博物館に残っている(サ 101-1、サ 101-3、サ 101-4a)。これらは小刀を左手で握って削ったらしく、削りかけの巻き方が通常の木幣と反対(Z巻き)になっている。また、本資料には特殊な剥幣がつけられている。通常の剥幣は長い削りかけ数枚を根元から剥ぎ起こしたものだが、ここでは、長い削りかけの基部に短い削りかけをつけ、ごく簡略化された木幣のような形にしている。長い削りかけは撫りをかけ、さらに撫り合わせて 2 本の房を作る。

ロシア民族学博物館にも、白浦の soopainaw と見られる資料が残っている(REM2816-4)。V.N.ヴァシリエフが、1912 年に収集した資料である。台帳には「ヌサ シラカバ製の棒状の一家の主人靈」とある[荻原ほか 2007:306]。頭部と胴を別材でつくり、頭部を胴の割れ目に挿して連結している。頭部はヤナギ製で、上端は水平に切断し、下端はクサビ状に整形する。↓の輪生短翅と、↑の散長翅を削りだす。胴はカバ製で、上端は斜に切断し、下端は尖らせる。全体に樹皮を残し、向って右に横枝を残す。胴から枝にかけて正面を削り、削印を刻む。

《2》東海岸小田寒の灰場武雄は、男女の家族神を祭っていた[藤村ほか 1973a:26-27]。2 神は上座の壁上、やや左に寄ったところに挿しており、神体はヤナギの木幣らしいという。年に 2 回剥幣を捧げ、それらが煤けて中身が見えないほどになっていた。灰場の育った頃には、この神を祭っている家はかなり稀だったという。家族神に関する記述が極端に少ないので、こうした状況のせいかもしれない。北海道では世代が代わるごとに作り変えるのが一般的だが、灰場家では祖父よりも前の代から同じ神体を祭っていた。春と秋に神事を行い、次に述べる soopainaw を捧げるほか、剥幣を巻きつけた。剥幣 2 本を継いだものを木幣に掛けて手前に垂らし、撫り合わせる。このような剥幣の巻き方は、ウイルタの木偶にも見られる。

神体の形状は不明だが、同地では、逆木の木幣、またはそれに人面を刻んだ守護神が収集されている。参考としていくつか例をあげる。

図 12 は、B.ピウスツキが、1897 年に大谷(タコエ)村で撮影した写真(REM2448-27)から起こした

ものである[荻原ほか 2007 : 386]。疱瘡が流行した際に、病魔を追うために作られた守護神である。マツ製らしい。根ごと掘り起こし、上下逆にして立てる。胴に削印がある。これは、来知志の家の守護神とほぼ同形である。さらに、削印よりやや上に撲った剥幣を縛り、何か草のようなものを挿しているように見える。

図9(REM2816-40)は、1912年に小田寒で収集された資料である[荻原ほか 2007 : 299]。台帳には「ニポボ 子供を護る靈の偶像」とある。材は不明。樹皮を全て剥き、梢を下にして使っている。頭部は水平に切断し、人面を刻む。胴には、向って右に横枝がある。胴の2箇所に削印・胴印を刻む。首にあたる位置に、黒と赤の木綿を結ぶ。

REM2816-40と似たものが、東京国立博物館に収蔵されている(28046)。同資料は徳川頼貞の寄贈品に含まれ、このコレクション成立の一翼は、野中完一という人物が担っている。野中は1905~1907年頃、樺太東海岸で収集を行っている[佐々木 1998 : 4-6]。

図10(REM2816-41 ab)は、REM2816-40と同時に収集されたもので、台帳には「センシテ・イナウ 子供の病氣用」とある[荻原ほか 2007 : 308]。シラカバを、上下逆にして使っている。頭部は水平に切断し、下端はクサビ状に整形する。頭部には↑の輪生短翅、その下に↓の輪生短翅がある。胴に削印・胴印を刻む。左右に枝を残し、向って左の枝には、金属製の鏃をかぶせている。右は欠損している。首にあたる位置に黒と赤の木綿を結び、シナ糸に木片を11個通した首飾りをつけている。

このように、小田寒では木幣型と木偶型の守護神が確認でき、灰場家の家族神は、これらのいずれかの形状であった可能性がある。

灰場家では、宝壇の木幣を soopainaw と呼び、3本一組のものが2組立てられる。これは、家族神に捧げたものである。形状は、左右に枝のあるもので、主となる木幣1本に、男女一対の木幣が付随する。春と秋に作り、季節によって樹種を変える。樹種の組み合わせは複雑だが、男神にはエゾマツかシラカバ、女神にはトドマツかハンノキを用いる[藤村ほか 1973a : 26-27]。

火神の性別、家族神との関係は不明である。

小括

樺太の神々に関する情報は豊富とはいはず、とくに1地域の情報を包括的に集めた研究が乏しい。筆者が調べ得た限りでは、火神は全て女性である。来知志では、家族神が夫となり、白浦もこれに近い。いっぽう、鶴城と小田寒では、家族神同士が夫婦となっており、火神の夫は不明である。また、家屋神に関する情報はほぼ皆無だった。

鶴城と小田寒では、宝壇の木幣を家族神に捧げたものとしていた(図39)。したがって、この地域の家族神は儀礼の際に宝壇の木幣と剥幣を受けることになる。この点は沙流川流域の祭り方(宝壇の木幣→家屋神、剥幣→家族神)とは異なっている。

家族神の形には、逆木に刻印を刻んだものと、人面を持つ偶像が見られる。逆木に刻まれる刻印は

人面の象徴として扱われているので¹⁴、権太の家族神は全体的に偶像的な性質を強く持っているといえる。逆木も人面も、在来的なアイヌ文化では忌避されるものだが、守護神に限っては比較的頻繁に用いられている。

逆木や人面は、アイヌよりも北方の民族にはよく見られるため、アイヌは北方からこれらの文化要素を取り入れたとする見方が一般的である(図13)。しかし、カムチャッカ半島や本州などアイヌに隣接する民族が、いずれも削りかけや木偶を持つ(図14、15)ことを考えると、歴史上のある時点まではアイヌにも木偶の習慣が存在したのではないかと思われる。

3. 北海道の家族神・家屋神の事例

つぎに北海道の事例を示す。冒頭で述べたように、沙流や静内では、宝壇の木幣と火神の祭壇の一部が重複するという現象が見られる。こうした習慣がどの程度普遍性を持つのかを知るため、火神の祭壇についても概要を示す。火神の祭壇については本誌第5号で報告しているので、ここでは新たに得た情報、所在の判明した資料を中心に述べる。

3-1. 北海道中央部

《1》旭川地方については、これまで知られている事例の多くが、明治以降に空知地方から移住した人々によるものである。近世から旭川地方に暮らしていた家系についての情報は、今後集成していくたい¹⁵。近文の杉村満によれば、火神の祭壇は主幣と副幣¹⁶からなる。いずれも↓の輪生短翅を持つ木幣で、主幣は頭部に刻印を施す。副幣は頭部を折り取るため、菊の花のような外観になる[相賀1985:32]。副幣は神事の過程で燃やし、主幣は炉の上手に祭りを行った「記念」として残す¹⁷。

《2》新十津川の空知信二郎¹⁸は、クマ送りの際、火神に主幣として「キケチノエ即ちチセイナウ」(長翅のある木幣)1本、副幣「ポンシュトイナウ」(短翅のある木幣)2本を捧げる。これらの木幣を総称して「アペサムウシペ」という。主幣は撫りを加えた長い削りかけ(以下、撫長翅)を、副幣は短翅

¹⁴ この点については北原(2007)で多少詳しく紹介した。

¹⁵ 大島稔は、旭川地方の火神を男女としている[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1986:150]。大島らの調査のうち、公開されたデータの中で、このような考え方の根拠となりうるのは、石山キツエ氏(雨竜伏古コタン出身)による説話資料のみである。この説話には apeucitono という名称が登場するが、ほかの儀礼や祭神についての証言中では、火神は女性として語られているように読める。

¹⁶ 形の異なる複数の木幣を組み合わせて祭壇を構成する場合、主となるものを主幣、そのほかを副幣と呼ぶ。

¹⁷ 杉村家の祭壇については平田篤史氏から教示を得た。

¹⁸ 同地方の情報は主として空知信次郎、空知保からの証言に基づく。空知信次郎は名取武光、河野広道らに情報を与えた。出生地は新十津川町トップだが、旭川近文に移住した。したがって調査時(1933年頃)の居住地は近文である。同じく新十津川泥川の空知保は、空知信次郎のいとこにあたり、河野のほか更科源蔵、平田角栄らに情報を与えた。

を持つ木幣である。これと別に「チセコロカムイ」にも「キケチノエイナウ」(撲長翅をもつ木幣)を作る[名取 1987(1941) : 60]。これが家族神にあたるのか、また火神との関係など詳細は不明である。

北 10698(図 17)、北 10705(図 16)は空知信二郎作と見られる資料である。北 10705 には、黒インクで「一九三三、一〇 近文空知家」、鉛筆で「チセコロイナウ」という記載がある。ヤナギ製で、全体の樹皮を剥き、頭部は水平に切断して、刃物で整える。下端は、円錐形に尖らせてている。頭部に施された刻印(以下、頭印)は、頭部の周囲を回るように刻まれている。その下に↑の撲長翅の房 16 本をつける。房は一方にまとめて、剥幣で束ねている。束ねた側の反対に、剥幣を剥ぎ取った跡の小さなくぼみがある。その下に、1 箇所だけ短翅を削りだす(以下、単生短翅)。これと同形の資料として北 10714 があるが、作風が違う。おそらくは同地域の別の男性がつくったものであろう。

北 10698 は、用途の記載はないものの、下端をとがらせていることから、屋内で使われたものと思われる¹⁹。形状は北 10705 とほぼ同形だが、輪生短翅がつき、頭印も違うものを刻んでいる。これは空知保の母方内浦家の印で、牝グマをとったときに使うものであるという[更科 9 : 67]。これと同形の資料として、北 10726 がある。

これらは、火神の主幣と「チセコロカムイ」へ捧げたものと考えられるが、どちらがどちらに該当するのかはわからない。輪生短翅を持つ北 10698 の方が格式が高いと考えられる。

記 8123(図 18)は、「ポンシュトイナウ」に当たると見られる資料である。資料本体には、ペンで「近文空知 アペサムシベ」、鉛筆で「火の神様 アイヌ語 アペサムシベ」という記載がある。ヤナギ製で全体の樹皮を剥き、頭部は水平に切断して整える。下端は尖らせ、頭部の周囲をめぐるように頭印を刻む。この印は「イワンチトッパ」と呼ばれる[青柳篇 1982 : 135]。↓の輪生短翅を、その下に軸の対角線上に短翅を削りだしている(以下、対生短翅)。対生短翅は↓で 4 段に別れ、各段は 90 度ずらして互い違いになるように削っている(十字対生)。記 8123 と同形の資料として記 8111、記 8121 があるが、これらは頭印を欠いている。近文の事例(主幣には頭印を刻む)を考えると、これら 2 点は副幣にあたるかもしれない。

北 10728 は、記 8123 と同形で頭印も同じだが、作風が違う。下方には外皮を残しており、線状に剥がした箇所(以下、線状剥離)が 3 本みられる。資料本体にペンで「ソクッチリ」という記載がある。北 10729 も同形だが、刻印が違う。本体には「リクチリ」という記載があり、rekuciri「首が高い(長い)」と解釈できる。短翅を持つ木幣の中には、短翅をつけた位置で頭部を切り落としてしまうものもある。これと比較して、首の部分(頭部)が長いということを指した、格式の高い木幣の呼称であろう。

空知保は、火神を女性だとしている[平田 1981 : 55]。火神の夫についての情報はない。家内の守護神について次のように述べている。

「家神 chisekor kamuy 男女なし. / nisyupu kamuy inau に魂を入れる／男女あり

¹⁹ 空知信二郎の木幣のうち屋外に立てるものについては、脚部を長く作るか、別材をついで 1m 以上の高さにしている。別材をつぐ場合は、下端を斜めにはつって接合する面を作っている。

平が男、斜に切ったの女／mindara huchi 入口の両方に二本たてる。」[更科 9 : 57]。

「chisekorkmauy, nisukukamuy は家の中に入り、鉢巻をして inaw を下げる。頭を平らに切ったものは男神、斜めに切ったものは女神である。」[青柳編 1982 : 136]

宝壇の木幣は、長翅を持つ木幣で、神事のはじめには炉に立てておき、祈りの後、神窓の横へ移す [平田 1981 : 55]。新築祝いについては次のように記録されている。

(家が：引用者) 出来上がるとはいる前に蓬の茎の弓矢で棟の両隅を射ち、隅ずみの悪魔を追い払いチセノミという式をする。また家の四隅にイナウ(木幣)を捧げ、これに酒を上げ外のヌサ(祭壇)も新しくして神がみに酒を上げる。炉ぶちにはチケイナウという本式なイナウ一本とその傍に小さなアペサムシベ(火の傍の者)というイナウを三本立てる。そのイナウを再び外のヌサ場で拝みミンダラフチ《広い所(炉の灰のたいらな所)》として火の傍に立てて自然に火が付くようにして、焼けると火の神がイナウを受取ったことになる。尚このイナウが十文字に燃えて倒れると主人に不幸があると言われ、更に拝むのである。チケイナウは神窓(東の方の窓)の入った左側にひっかけておく。ミンダラフチだけ女も詣ることができるイナウである。[平田 1981 : 63]

以上をまとめると、空知家では、大きな神事の際に撲長翅を持つ木幣が 2 本作られることになる。1 本は火神に捧げた後で宝壇へ、もう 1 本は cisekorkamuy に捧げられる。cisekorkamuy が家族神と家屋神のいずれなのかわからないが、性別がないというので、少なくとも火神の夫という意識はなかったと思われる。屋内には、このほかに nisukkamuy 「頼みにする神」の木幣があった。nisukkamuy の形状は不明な点もあるが、頭部の切り方で性別を表現し、剥幣を付加するという点は沙流の守護神と共に通するものを感じさせる。

泥川の門野トサは、対生短翅を持った木幣、長翅を持った木幣を病気の際の「お守り」にすると述べている[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1983 : 60]。これらの証言から推測すると、新十津川の nisukkamuy は、浦河に見られるような長翅を持ち頭部を斜に切った姿に作られていたのではないだろうか(図 25)。

《3》千歳は、石狩川流域に隣接し、空知方面とも姻戚関係があった。家族神は外皮三生短翅をもつ木幣で、囲炉裏からとった消し炭を心臓として取り付けられる。火神は女性で、家族神がその夫とされる。

火神の祭壇については、千歳鳥柵舞の小山田小三郎は、酒を作つて神事を行う際に「hucikamui に kikechinoeinau 1 本, chihorokakep 4~5 本 chihorokakep」を捧げると述べている[青柳 1982 : 146]。hucikamuy とは火神の呼称の 1 つである。主幣(撲長翅をもつ木幣)1 本と副幣(対生短翅をもつ木幣)4 本を火神に捧げるとされている。

《4》同じ千歳鳥柵舞の今泉柴吉は「abekamui 5 本, 戸口の神 2 本, chisekorkamui 1 本を作るが,

abekamui にあげるものは焼いてしまう。また、chisekorkamui には kikechinoeinau 1 本をあげるが、熊祭の前日、chisekorkamui に熊祭の許しを得、当日には取去る」と述べている[青柳 1982:71]。

cisekorkamuy に捧げた kikecinoye(撫長翅をもつ木幣)を「取り去る」とは、神事の過程で炉頭の木幣を宝壇に移すことと解釈できる。cisekorkamuy は家族神である。小山田と今泉では、宝壇の木幣に関して異なった説明をしている。火神と家族神は夫婦であるから、2 神が 1 本の木幣を共有するという発想があったのかもしれない。そのように考えると、2 人の話者は、一連の事象の違った箇所を説明しているとも解釈できる。

《5》石狩下流の茨戸では、家族神は poroinaw と呼ばれ、長翅を持つ木幣に、剥幣を加えたものである[青柳 1982 編:134]。「神棚」に祭り、儀礼のたびに剥幣を 6 本ずつ加えるので次第に大きくなっていくというから、浦河や釧路の守護神のような姿をしていたのだろう(図 25、29)。火神と守護神の関係、宝壇の木幣については不明である。

《6》余市では、「家神の幣」として男女一対の「テクウシイナウ」(枝がついている木幣)というものを作られる[名取 1987(1959):96-97]。形態は、双腕を持つ木幣で、男性の木幣は頭部と双腕に計 3 本の木幣を連結している。女性の木幣(北 10187-1)は、木幣 2 本と、向って左の腕にはササ束を連結している(図 19)。木幣は、いずれも撫長翅を持つ木幣である。形の上では、樺太東海岸に見られる宝壇の木幣に似ているが、これが神体なのか奉納物なのかは不明である。火神の性別と、その伴侶は不明である。

宝壇の木幣については記録がない。北大植物園には、煤が附着して黒色になっている資料がある(北 11211～北 11214)。屋内に長く安置されていたことがうかがわれる。おそらく、これらが宝壇の木幣なのである。形態は、撫長翅を持つ木幣(北 11213、北 11214)と、撫長翅をさらに撫り合わせた房(以下、編長翅を)を持つ木幣(北 11211、北 11212)である。前者を女性、後者を男性とする見解もある[難波・青木 2000:19]。

火神や、祭壇についての情報はない。

3-2. 北海道南西部

《1》八雲に関しては、筆者はわずかな情報しか得られていない。海の獲物の靈送りに関する聞き書きの中に「onne huchi」(老いた老女)と「kenru kor kuru」(家を司る者)という名が見える程度である[更科 10:187]。前者は火神、後者は家族神か家屋神だと思われる。まだほかにも記録はあるものと思われ、あらためて集成すれば明らかになることは多いだろう。

《2》長万部では、火神に捧げて祭ったあと、その木幣の 1 本を上座に移し kenrusopakamuy 「建物の上座の神」に祈るという記録がある[名取 1940:148]。記述から見て一回性の木幣のようである。

宝壇の木幣にあたるものであろうか。木幣の型状は不明だが、火神の祭壇が複数の木幣で構成されていること、そのうちの1本を kenrusopakamuy と共有していたことがわかる。

《3》虻田では、宝壇に「sinoinau」を5、6本立てる。そして、家人と家全体を守る「sisokorkamuy」(本座の神)を立てるという。形態は不明である。sinoinaw という名称は、長万部では編長翅を持つ木幣を指す[名取 1941]。

《4》白老では、沙流と同じく、外皮三生短翅を持つ家族神を祭る。この神は火神の夫である。ほかに、漁狩獵と子供の成長を見守る守護神も祭られる。これらは、頭部を斜めに切断した形状から、女神であると考えられる[更科 18:96]。これら三神の脇に、対生短翅を持つ木幣を立て、kamuyapakusa 「神の部下」と呼ぶ[更科 19:48]。これも、恒常に立てておかれる、補佐的な守護神である。また、病気の際に作る守護神は、長翅を持つ木幣に、剥幣を付加したものである[更科 18:96]。

《5》沙流川流域では、外皮三生短翅と、消し炭の心臓をもつ木幣を家族神とする(図 22)。火神は女神で家族神と夫婦になっている。家屋神は cisekatkemat と呼ばれる女神である。宝壇の上の壁に「chisei sambe」または「cisei noibe」と呼ぶカヤの束を取り付け、家屋神の心臓とする。撫長翅を持つ「chisei koro inau」(図 20)を家屋神に捧げるほか、壁や柱の隙間に挿し込まれる剥幣も家屋神に捧げられたものである[Munro 1996(1962): 61, 64-65]。

クマ送りの際には、前記 cisekorinaw 1本を主幣とし、副幣の「チエホロカケップイナウ」4本とで火神の祭壇を作る。cisekorinaw は、神事の過程で上座の天井近くに挿す[伊福部 1969: 42-43]。

《6》貫気別の黒川セツ氏は、個人的な守護神を2神祭っているという。1つは祖父が作ったもので、形態は外皮三生短翅を持つもの、もう1つは、おじが作ったもので、対生短翅を持つものだという[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1997: 33, 35]。

《7》静内農屋の鷺塚鷺太郎は、外皮三生短翅をもつ木幣を「chisekorinau」家族神とし、頭部を水平に切ったものが男性の cisekorinaw、斜めに切ったものが女性の cisekorinaw である。火神の祭壇は主幣1本と副幣を最大3本立てて作る[青柳 1982: 153-154]。

なお、鷺塚からの別の書き書きでは、頭部が斜めの木幣を「uresipa kamui (punkikamui)」(養育の神か)、水平の木幣を「chise kor kamui」(家族神)としている[更科 7:13]。次の栄栄吉との比較でいえば、火神の主幣(宝壇の木幣)が cisekorinaw、家族神が cisekorkamuy、個人の守護神が urespakamuy となるのが妥当ではなかろうか。

《8》静内の栄栄吉は「チセコルカムイ 家ヲ守ル神」と「ウレスパセレマクエブンキネカムイ 家内一同ヲオ守リクダサル神」を祭る[栄ほか 1978 : 7]。おそらく、前者は外皮三生短翅をもち頭部を水平に切ったもの、後者は斜めに切ったものであろう。

また「チセカムイ 家ノ神」への祈りの中では「チセペヌッタホラリカムイカムイオッカヨ 家ノ上手ノ方ニ座ツテイル神男性ノ神」と「チセパンノクワホラリカムイメノコ 家ノ下手ノ方ニ座ツテイル女神」の男女2神に呼びかけている[栄ほか 1978 : 7]。

火神は女神である[栄ほか 1978 : 6]。家族神との関係には言及がない。

《9》浦河の鱗川今太郎²⁰は、家族一人ひとりに対して守護神を作り、「チショロンヌサ²¹」に祭っていた。祭神の名称は「ヘンネサカイカムイ(龍神、カムイクワをもたせる)、／妻(チセコレマタイヌ)(カムイクワをもたせる)、／主人(セレマクコレカムイエカシ)(カムイクワをもたせる)／[空白](セレマクコレカムイエカシ)(カムイクワをもたせる)、／次男のセレマクコレカムイエカシ(次男があとをつぐ、カムイクワをもたせる)、／チセコレエカシ、長男のセレマクコレカムイエカシ」である。また「祭るときにカムイコソンデを祭るときにつける、内にじゅば／んのやうなものを着せる」としている[更科 12 : 16]。

このうち、「チセコレエカシ」とあるものが、家族神にあたるのであろう²²。また、これらの守護神は、持ち主が死去すると、「kamuyottasuka(神様さびしい)」といって送り返す。所持者の葬式がすんでから「nusa／と murukutausi の間(nusakes)に休ませる」という。この靈送りを「kamuyomarube」という[更科 18 : 2]²³。

以下に示す資料は、更科が依頼してこれらを複製したものであろう。どの資料がどの神にあたるのかは、今後の検討を要するが、記 89478 は「フンネサカイカムイ」と記載があることから、上記の龍神の木幣であると思われる。形態は2段の十字対生する対生短翅を持つ木幣である。さらに、記 89471 は同形の資料が計3点あり、男性の家族(主人、長男、次男)のために作られた守護神のように思える。仮にそう考えると、記 89480 と記 89472 が、家族神と女性の守護神のいづれかにあたることになる。

記 89480(図 24)は、長翅を持つ守護神の例である。資料本体には、ペンで「セレマックルカムイ(トッパはメナブツイトッパ)海の神はアシベイトッパ 様似野深 鱗川今太郎」、鉛筆で「前」という記載があり、「様似」の上からマジックで「荻伏」と訂正してある。ヤナギ製。頭部は水平に切断し、

²⁰ 浦河に生まれ、更科が聞き書きを行った 1959～1962 年頃は、荻伏在住だった[更科 12 : 12]。

²¹ cise or un nusa 「家にある祭壇」だろうか。宝壇付近を指すと考えておく。

²² ほかの神には、神名の前に「妻」「次男」などと書かれているのは、所持者を表しているのだろう。これに対し「チセコレエカシ」と龍神は「誰それの～」という限定がないので、家内全体を守護する神だと思われる。

²³ 「omarube」に似た言葉として、omaruypa 「靈送り」がある。

一部だけ面取りをする。頭部の前後に頭印を刻む²⁴。↑の散長翅をつけ、正面やや左を削り残して隙間をあける。胴の中央付近の向って左側に↑の単生短翅をつけ、削りかけの下に炭をつける。単生短翅をつける場所は、長翅の削り残しの真下になる。下端は、左から斜めにはつり、結束のための段(切り欠き)をつくる。

記89471(図25)も、長翅を持つ守護神の例である。ヤナギ製。頭部は斜めに切断する。頭印は正面に1箇所、X印のような切り込みを入れる。↑の散長翅をつける。長翅はやや間隔をあけて1~3枚削りだされ、全体で14枚削りだされている。擦りが全く無いことから、仕付けを施したとみられる。正面は、切り込みのために、2枚ほど削りかけの根元が切れている。長翅の削り始め付近と胴の中央2箇所をしばり、上には5本、下に12本の剥幣を挿し込む。それら全体を束ね、帯をするように、外側から剥幣でしばる。同形の資料として、記89473、記89474がある。

記89472(図26)は、短翅を持つ守護神の例である。資料本体には、ペンで「セレマクルカムイ 様似野深 鱗川今太郎」、太いペンで「守神、胴体インジュ、サンペ■■■/柳のキケをそんぐにする」という記載があり、「様似」の上から緑のペンで「荻伏」と訂正してある(■は判読不能)。ヤナギ製。頭部は鋸で水平に切断し、一部だけ面取りをする。上部の外皮を剥き、十字対生する↓の対生短翅を2段つける。正面下部に↑の単生短翅をつけ、削りかけの下に炭をつける。単生短翅をつける場所は、上から2段目の対生短翅の真下になる。2段の対生短翅の間に剥幣を結び、6枚の剥幣を挿し込み、帯をするように全体を剥幣でしばる。

宝壇の木幣に関するものとして、守護神に並んで立てられる「カムイフチヌサ」という木幣がある。この木幣について「(本当は炉にたてるイナウ)」や「kamuy huchi inau の古くなったのここに納める」という記述もある[更科18:4]。二風谷や静内のように、儀礼のあいだ炉頭に立て、終ってから宝壇にさす木幣であろうが、記述の内容からして、炉に置かれる期間が長いようだ。そして、儀礼を重ね、炉内の木幣が多くなると宝壇に移すということではないだろうか。

《10》三石の幌村家では、浦河と同様に家族それぞれの守護神を作った。それらと「カムイエカシ」と呼ばれるものを並べて祭った。「カムイエカシ」が家族神であろう[更科12:24]。火神は女性である[更科12:18]。

《11》様似の岡本惣吉は、家族神として cisekorkamuy を作るほか、punkinekamuy 「見守る神」をエンジュで作る[更科11:109]。岡本ユミは、守護神を cise epunkine kamuy ekasi 「家を守る神翁」と呼び、男女の神(頭部の印が異なる)を祭るという[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1985:135]。この2神を夫婦と見なす見解もあるが、静内、浦河、三石のように一方は個人の守護神であると考えることもできる。火神との関係は、不明である。なお、河野は様似古海家の守護神を図化してい

²⁴ 以下、「前」と書かれた側を正面として説明する。

るが、これを見ると本体部分は対生短翅を持った木幣である[青柳編 1982 : 213]。

3-3. 北海道東北部

《1》伏古の古川辰五郎は、火神の祭壇を主幣 1 本と副幣 5 本で構成する。いずれも 3 段の対生短翅をもつ木幣で、主幣は大きく作る[犬飼・名取 1939 : 257-258]。

北 10758(図 27)は、古川作の資料で、宝壇の木幣とみられるものである。撫長翅をもち、頭部の前後に頭印を刻む。

《2》伏古の近井フトマツは、家の神を男性の火神と明言している。重要だと思われる所以、原文を引用する。

「炉に捧げたイナウは火女神(アペフチカムイ)、家の西南隅のチセコルヌサシヤンのイナウは、火女神の夫(アペウチカムイエカシ)に捧ぐるので、共に夫婦で家を守るものとする。家屋を新築すれば、庭の出入口のわきに、チセイ・サンペの代りに、シツウイナウの小さい削りかけを作って挿し挟む。アパサウン・カムイに捧げる所以ある。チセコロ・イナウはアペウチ・エカシに捧げるイナウで、イナウそれ自身を神として祭るのでも、拝むものでもない。」[吉田 1984(1953) : 116]

採録者の吉田巖自身も、日高以西で語られる家内の神々の複雑な関係、そして十勝との相違を強く意識しての聞き取りだったのであろう。実に明確に、要点を説明している。

《3》伏古の山川弘は、家族神を作らない[内田 1998 : 113]。宝壇の木幣は「チセイナウ」と呼ばれ、長翅を持つ木幣である。cisekorkamuy、cisesikkamakamuy、cisekorekas などと呼ばれる家を守る神に捧げられている[内田 1991 : 18]。この神は男神で、火神と夫婦ではないかと言われている。

火神の祭壇は主幣 1 本に副幣 5 本を組み合わせる。いずれも対生短翅をもつ木幣で、主幣はやや大きく作る[藤村・加藤 1984 : 350-358]。以前は炉に木幣を残したが、近年は社会状況の変化から置いたままにして粗末になっては困るということで、全て燃やすようになったという[アイヌ民族博物館 1994 : 9]。

《4》十勝音更の中村要吉は、やはり火神を男女の神とし、女神は炉に、男神は家の西北隅(宝壇の奥)に座すという[吉田 1984(1956) : 172]。

《5》十勝芽室太では、火神「kamuyhuchi」と、「家の守神 rottakamuuy ekasi」が夫婦だという記述だけがある[更科 18 : 65]。

十勝より東では、火神の男女が炉の中にいるとする地域が多い。伏古、音更の例は東西の 2 つの考え方の中間に当たることが興味深い。

《6》足寄では、cisekorkamuy の木幣を神窓の左側の壁にさす。形状は撫長翅を持つ木幣である。これと別に宝壇の壁には、散長翅を持つ木幣をかけるという[青柳編 1982 : 166]。いずれかが家族神かと思うが不明である。

《7》塘路では、新築時に、上座の梁の上に木幣を立てた。また「matta roppa ekasi」(奥に座す翁)という守護神があり、ともに家長が死亡すると送った。形状は不明である。家長の死後には、寡婦のための「matta roppa ekasi」が作られる[更科 8 : 184]。土佐藤蔵氏の家には、5つの「matta roppa ekasi」があり、獣があるたびに剥幣をつけ、とても大きくなったという。人型のもの、手のついたものもあったという。

火神の祭壇は、平素は対生短翅をもつ男女の木幣2本ずつで作り、ヒシの実祭りなど大きな神事ではもう1本木幣を加えた[更科 8 : 182]。副幣は燃やす。火神の性別などは言及がない。

《8》白糠では、屋根の上と、屋内上座に撫長翅を持つ木幣を立て、すべて ciseinaw と呼ぶ。屋内に立てるものは、シマフクロウや木の神などの諸神に捧げたものであり、屋外の祭壇の規模を小さくして屋内に作ったものようだ。屋根の木幣は、新築時に棟の両端に立て、cisekorkamuy に捧げたものである[北海道教育長生涯学習部文化課編 1994 : 115-117]。これは一度立てた後は、立てなおしたり、祈りを捧げることはないという。屋根の木幣は、静内付近でしばしば事例のある takusainaw に通じるように感じる(後述)。

記 89482(図 28)は、和天別の「チセコロイナウ」である。撫長翅を持つ木幣で、頭印などはない。守護神の報告はない。また、火神は男女の神で、炉の中に座している。儀礼のたびに火神に捧げた木幣が、炉の上手に立てられていく(後述)。男性の火神は、この木幣群の上に腰掛けているという。

貫塙喜蔵の火神の祭壇は、大きめの主幣1本と、副幣5本を組み合わせて作る。主幣は炉に残し、ここに男性の火神が腰掛けるという[更科 18 : 74]。形態は対生短翅を持つ木幣で、↑に削ったものが男性、↓が女性の木幣である[青柳 1982:183]。主幣が男女いずれの形をしていったかは不明である。

《9》釧路下雪裡の八重九郎は、makwakamuy 「奥の方の神」あるいは mattarokkamuy 「奥に座す神」と呼ぶ守護神を祭る(図 29)。守護神には様々なものがあり、削りかけの中には、小刀、石、魚などが入っているという。これらは cikosiratki と総称され、祈りの際に mattarokkmauy と呼ぶ[青柳編 1982 : 122]。

このことが更科の書き書きにやや詳しく書かれている。

「●家の守神／シコシラッキブ これはそれ自身が神であり、神に捧げたもので／はない、新しい家をつくるとつくる。／teke kor sikosirat kip といふのもある。／鮭の腸の中から出た石とかめづらしい宝物がさづかると、それを中に入／れれ ei kosirat kip をつくる。これは／inonno

kamuy で人間のかわりに、人間の思っていることを／神様に連絡して神様の気持ちをそっちの方へ引きつける役をするもの／だ。／カケスの卵の入った巣を見つけると、これは最高の inonnonokamuy だ／(藁つとをさげたような型をしている) ／●病気のイナウ ヒエイクル・ブンキカラ ・イナウ(病人 番をする)病気したときにたのむ。／快ったらヌサに納める。」[更科 11 : 149]

新築にともなって作るとあるものの、家族神なのか、個人の守護神なのか不明である。火神は rorwaekasi 「上手の翁」、usarwahuci 「下手の嫗」と呼ばれる男女の神で、炉の中に座している。儀礼のたびに、火神に捧げた「abesitoinau」を 1 本ずつ残し、この上で「abeucikamuy」と mattarokkamuy が相談をするという[更科 10 : 81]。

《10》釧路春採の秋辺福太郎、徹別の八重フサは、火神を男女の神とし、それぞれに木幣を立てる。また、炉の一番下手に rorwahuci 「上手の嫗」が座すとするが、ここには木幣を立てない[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1986 : 82]。

《11》厚岸では火神に 2 本の木幣を捧げ、炉の中に残す[青柳 1982 : 125]。

《12》屈斜路の山中西藏は、主幣 1 本に副幣 6 本を組み合わせて祭壇を作る。副幣は燃やし、主幣は炉に残しておく[青柳 1982 : 129]。主幣は輪生短翅を持つ木幣(図 30)、副幣は対生短翅をもつ木幣で、↓に削ったものが男性、最下段だけを↑に削ったものが女性である(図 31、32)。

火神について makwakamuy を祭る。更科は、この神を「家の神」としているが、実際はエゾイタチの頭骨や、珍奇な品々を木幣に包んで林立させているものである[更科 1933 : 51]。本稿で問題にしている、家族神としての木幣がここに含まれているのか疑問である。

山中西藏は、5 つの makwakamuy を祭っていたという[更科 8 : 188]。

火神は男女の神で、儀礼の際に捧げた木幣は、炉の上手に並ぶ(後述)。

《13》屈斜路の弟子小太郎が虹別で行ったクマ送りでは、主幣「アベウチカムイイナウ」1 本に、小さい男女の「シユトイナウ」2 本ずつを組み合わせて祭壇を作った。主幣は炉に残し「トノトカライナウ」あるいは「サケカライナウ」とも呼ぶ。火神は男女の神である[佐藤 1958 : 45-46]。

また、「マカンカムイ即ち家の神」に撫長翅を持つ「ヤヤンイナウ」を捧げた[犬飼・名取 1987(1940) : 106]。「マカンカムイ」は、makwamakuy や mattarokkamuy と同様の神だろうか。とすれば、家長や家人の個人的な守護神と考えられる。

《14》阿寒の舌川原キサは、家の棟の両端に「ciseinaw」を立てるという。秋辺カヨは、自身の守護神として「kamuyhuchi」(図 33)を祭っていた[更科 18 : 86]。舌辛音作は、屋内に「kannnakamuy」「metoteyamikamuy(ミヤマカケス)」、「ponkamuy(マタギの神)」を祭っていた[更科 11 : 49]。これ

らを写した写真を見ると、頭部に↓の輪生短翅を、その下に撚長翅を削りだした木幣である[更科 1968 : 53]。ミヤマカケスは、撚長翅を束ね、そのなかにカケスを入れて祭っているようである。

秋辺福治は、火神を「abe syutu ekasi」「abe syutu huci」という男女の神であるとしており、主幣「inonno inau」1本に副幣を組み合わせて祭壇を作る[更科 11 : 2-3]。

日川キヨ氏の父は、神窓の横、北西隅の壁に縛りつけた木幣を cisekorkamuyinaw と呼んだ。cisekorkamuy は男神だという。木幣の形状は「ふつうと同じ」というので、屋外の祭壇に立つ長翅を持つ木幣のようなものであろう。儀礼のたびに神酒を捧げ、秋の大祭で送るという[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998 : 147]。このため、守護神の神体ではなく、奉納物としての木幣であったと思われる。

火神は男女の神で、囲炉裏の左右の奥隅にそれぞれの木幣を立てる。秋に新しくする[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998 : 155]。

《15》美幌の菊地股吉は、火神を男女の神とする[北海道教育長生涯学習部文化課編 1986 : 84]。家族神等については情報がない。

菊池儀之助は主幣1本(男性)と、男女の副幣を組み合わせ、副幣は燃やす。主幣は、家長が在世中は炉に残しておく[知里 214 : 78-79]。

主幣(図34)と男性の木幣(図35)は↓の輪生短翅と、その下に↓の対生短翅3段をもつ。女性の木幣(図36)はほぼ同じ形だが最下段の対生短翅だけが↑のものである。

大正～昭和初期に行われたと思われる Munro の聞き書きには、炉の中から家の神の心臓を得るという記述がある[Munro 1996(1962) : 47]。おそらく消し炭を心臓に使うということなのである。心臓を具体的にどう用いるかは書かれていらないが、次に引用する網走の事例に続けて書かれていることから、同じような用い方をするという意味で書かれたものと考えておく。つまり、角の柱に剥幣で消し炭を縛り、それを家の心臓と呼んだと考えられる。

《16》網走の工藤貞助は、北海道の北部では家族神などの神体を作らないと述べている。工藤は、屋内の角にある柱の床上 60cm 付近に剥幣で鐸を縛りつけ、これを家の心臓と呼ぶ[munro 1996(1962) : 46-47]²⁵。

工藤からの別の聞き書きでは、輪生短翅と対生短翅を持つ木幣を「チセコロカムイイナウ」とし、新築時に、棟木に結びつけるという[米村 1981(1937) : 170, 191]。ほかに、inumakorkamuy 「宝壇の神」を「家の守り神」とした報告もある[知里・米村 1980(1958) : 159]。両者が同一のものを指しているのかは不明であるが「チセイコロカムイイナウ」は家屋神に捧げたものと考えてよいだろう。

火神は「Abe-ochi Ekasi(Fire-shining Ancestor)」と「Abe-ochi Fuchi(Fire-shining Ancestress)」

²⁵ 四隅の柱すべてに心臓をつけるのか、あるいは宝壇近くの柱なのかは明記されていない。

という男女の神とされ、上手に男神が、下手に女神が座す。男神の方が高位で強い靈力を持つが、重んじられているのは女神の方であるという。これは、女神の方が、出産や子供の成長など平素から祈願を受ける機会が多い、という意味合いらしい。

火神の祭壇は男神に「pinne」の、女神に「matne」の「shutu inau」が2本ずつ立てられる。形状は美幌とほぼ同じである。神事の後、男神の木幣を1本だけ残して、他は燃やされる
[Munro1996(1962) : 34-35]

小括

北海道の守護神は、大きく長翅を持つものと外皮三生短翅を持つものに分かれる。これまでよく知られていた守護神は後者であり、白老から静内まで分布が見られた。これは外皮三生短翅の分布域とほぼ重なる。長翅を持つ木幣を祭る地域では家族神があまり見られず、個人の守護神が多く用いられる。浦河は、外皮三生短翅分布域の境界に接しているためか、興味深い形式が見られる。長翅を持つ木幣は概して頭部を水平に切断してあるが、浦河では斜めに切断したものが見られた。この、頭部の形状は、おそらく所有者の性別と対応している。また、長翅を持つ木幣に、炭で心臓を付けているが、こうした例もほかには見られない。

火神の祭壇は主幣と副幣から構成され、主幣1本に対して副幣は4本～5本という内訳も、おおむね共通している。様似より東では、副幣に男女の別があるが、西の地域ではそれほどはっきり区別されていない。しかし、いずれの地域でも副幣は燃やし、主幣を残す。

浦河から西の太平洋・噴火湾沿岸では、火神に捧げた主幣を宝壇に移し、家屋神や何らかの家屋に関わる神に捧げるといった事例が広く見られる。これに対し、帶広より東では火神の主幣を炉の中に残しておく。東と西では主幣の取り扱いが大きく食い違っているように見えるが、火神の夫の側に主幣を置くという点では共通している。すなわち、宝壇に主幣を移す地域では、そこに座す家族神が火神と夫婦になっていることが多く、炉内に残す地域では、火神は男女の神と見なされているのである。

火神が男女の神となっている地域では、宝壇の木幣があまり見られない。いっぽうで、屋根の上に立てる木幣が白糠、阿寒に見られる(表2)。

屋根の上に立てた木幣は、ほかにほとんど類例がないが、静内付近に見られる takusakorinaw に似ている。takusakorinaw とは、対生短翅を持つ木幣を中心とするササの葉を束にしたもので、流行病を避けるためのものだと言う。静内では、menasunkur「十勝・釧路系」と sumunkur「日高系」と呼ばれる人々が混在しているが、takusainaw を用いるのは sumunkur だという[北海道教育長生涯学習部文化課編 1992 : 39-40]²⁶。位の高い人は takusainaw を屋根に立て、位の低い人は、祭壇に立てる。近隣の人々が集まり、年に2回立てなおす。takusainaw を立てるための祭りは持ち回りで行い、当番の家の屋根に立てる。古いものは解体して送る。

白糠の屋根幣は新築時に立てたきりであり、takusakorinaw が西方系に分布するという証言を考え

²⁶ 上に例を挙げたように、屋根の上の木幣が見られるのは北海道東部が中心であり、この証言と反対になっている。

ると、現時点で両者を関連付ける要素はそれほどないかも知れないが、今後も注意してデータを集め
る必要はあるだろう。

	火神・配偶者		家族神・配偶者		宝壇の木幣	屋根幣
鶴城	女性	—	男女	家族神	家族神に	—
来知志	女性	家族神	男性	火神	家族神に？	家屋神に？
白浦	女性	家族神	男性	火神	家族神に	—
小田塞	女性	—	男女	家族神	家族神に	家屋神に？※
空知	女性	—	—	—	炉→家屋神に	—
千歳	女性	家族神	男性	火神	炉→家屋神に	—
茨戸	—	—	男性？	—	—	—
余市	—	—	男女	家族神	家屋神に？	—
長万部	女性	—	—	—	炉→家屋神に？	—
虻田	女性	—	男性？	—	—	—
白老	女性	家族神	男性	火神	炉→家屋神に	—
二風谷	女性	家族神	男性	火神	炉→家屋神に	—
静内	女性	家族神	男性	火神	炉→家屋神に	病魔よけ
浦河	女性	—	男性	—	炉→家屋神に	—
三石	女性	—	男性	—	—	—
様似	女性	—	男性	—	—	—
伏古	男女	火神	—	—	男性の火神に	—
音更	男女	火神	—	—	男性の火神に	—
足寄	—	—	—	—	家屋神に？	—
塘路	男女	火神	個人守神のみ	—	—	梁:家屋神に？
白糠	男女	火神	—	—	—	家屋神に
釧路	男女	火神	個人守神のみ	—	—	—
屈斜路	男女	火神	個人守神のみ	—	個人守神に？	—
阿寒	男女	火神	個人守神のみ	—	家屋神に？	家屋神に？
美幌	男女	火神	—	—	—	—
網走	男女	火神	—	—	家屋神に	—

表2 ※小田塞の例は、厳密には外壁に沿って立てる。

むすび

在来的なアイヌの信仰は、細部においては多様性を持つものの、神のとらえ方や靈送りの思想など大きなところでは高い共通性を持っている。木幣の使い方を見ても、これを贈与物とするばかりでなく、少しづつ形状を変えて序列化し、祈願の対象や内容に応じた格式のものを使い分けるといった点が各地方に一貫している。しかも、序列化の方式までもがほぼ共通しており、こうした点は、本州の削りかけ習俗に比べ、かなり統一的な体系をなしているといえる。

火神は、そうしたアイヌの信仰において中心的な位置をしめ、どの地域にあっても日常生活においてもっとも大切な神と見なされている。その火神の夫が、地方によって全く別の神と考えられているのはなぜだろうか。いくつかの異なった思想が融合しつつ並存しているのか、それとも、同じ思想の中に地域的に生まれた変化なのだろうか。

この問題を考えるにあたっては、いくつかの視点がありうる。たとえば、かつて北海道アイヌの住居には囲炉裏とカマドという2つの火が共存していた時代があった。権太では、冬季住居でカマドが使われていたし、20世紀に入ってからも来知志では2つの炉を設けた家が存在した。また、北海道でも、徹別の首長の居宅には3つの炉があったという証言がある[更科18:82-83]。火神に男女の別がある理由を、こうした実際の住居形態と結び付ける考えができるかもしれない。ただ、来知志では、祈りを捧げるのは上手の炉で、これを sianunci「本当の火」と呼んでいる。火神は女神のみである。徹別でも、祈りを捧げる対象は rorunsoape「上座の炉」とされている。

また、アイヌの思想では、様々な事物を pinne～「男性の～」、matne～「女性の～」という男女一組のものとしてとらえる傾向がある。例えは狩猟用の矢にも pinneay「男性である矢」と matneay「女性である矢」があるといい、あるいは斜里川を pinnesar「男性である葦原」、沙流川を matnesar「女性である葦原」と呼ぶ。また、熊の背骨の下半分(腰椎)を matneikkew「女性である背骨」とよび、神界に対して人間界を matnemosir「女性である世界」と呼ぶこともある。こうした表現を見ると、左右や上下などの2項対立的な要素を性別に置き換えて表現する傾向があるように思える。

こうした傾向は神々への観念にも見られ、戸口の左右、窓の上下などに座す神は男女一組の神とされる。右と左では左の方が神聖であるとされ、左や上には男神が座すことが多い。一艘の船には、船底、舵、あかくみなどに11組の神が座すと伝える神話もある[名取1987(1940)]。火神を男女の神ととらえることも、こうした思想の一環と考えればそれほど違和感はないようと思える。しかし、やはりアイヌ全体として見れば、男性の火神は特異な存在である。

地理的に見れば、男性の火神を祭る地域はごく一部である。権太では、男性の火神はまったく見られず、北海道でも、名寄や宗谷といった北部の情報が乏しいものの、ほぼ西半分が火神を女神とする。

また、物語に現れる火神は常に女性である。火神を自叙者とする物語は北海道各地に伝わっているが、男性の火神を重視する白糠においてさえも、物語を語るのは女神である。権太においても、主人公を助ける老婆として火神が現れる。空知地方の説話に男性の火神が現れた例があるが、非常に稀な

ことである²⁷。

このように、女性の火神は普遍的な存在で、座所も炉の中に一定している。一方、その夫は必ずしも火神ではなく、座所にも宝壇や炉の上手といった地方差がある。ここで重要なのは、いずれの場合も、火神の主幣が置かれる位置には、火神の夫が座しているという点である。このことに注目して、考察を試みることにする。

3節で見たように、北海道東部では、火神の夫は炉内に座しており、主幣の上に腰かけているといふ。守護神は個人的な守護神で、火神とは特に無関係なく祭られている。家屋神の存在はよくわからない(図38)。これに対し北海道西部では、火神の夫は宝壇に座す家族神であり、主幣も宝壇におかれ。ただし、主幣は家族神ではなく家屋神に捧げられていた。火神の夫が別に存在していながら、なぜ火神と家屋神が木幣を共有するのかが疑問点だった(図37)。

これらの地域の中間にあたる十勝では、火神の主幣とは別に、長翅を持つ木幣が宝壇に置かれる(図40)。同地方では、男性の火神と家屋神が同一視されている。男性の火神は、平素は宝壇に座しており、宝壇の木幣は男性の火神に捧げるために宝壇に立てられるのである。こうした十勝の事例は、東部・西部の両方に通じ、双方のズレをつなぐ理解に導いてくれそうである。

家族神は東部に行くほど事例が少くなり、個人的な守護神が目立つようになる。室内全体を守るという性質は希薄なようである。これに対し、西部では、家族全体を守護する神があり、その上で、病弱な者などに必要に応じて守護神が作られる。ただ、家族全体を守護するといつても、世帯が分かれた際にはその世帯のために新たな神が勧招され、家長の死後には家族神も靈送りを行うなど、家長との結びつきは強固なものである。したがって、西部の家族神も、家長の個人の守護神が、職能を拡大したものと見ることもできる。

こうした事実から、筆者は、火神に対する認識の地方差が形成された過程を、次のように考える。

①火神は、全ての地域において女神とされ、家屋神を伴侶としていた。

②東部では、ある時期から、家屋神が火神と同一視された。座所も炉の中へ移った。

③西部では、個人の守護神が家族神化し、家屋神と入れ替わった。

①②については、逆の経過をたどった(男性の火神が家屋神と見なされるようになった)可能性も考えられるが、そうだとすれば、男性の火神はもう少し広がりを持っているはずである。③については、こう考えることで、火神と(婚姻関係にない)家屋神が、木幣を共有することが説明できる。つまり、火神の主幣が家屋神に捧げられるのは、十勝の事例のようにかつてこの2神が夫婦だったことの名残ではないか、ということである。

これは、北海道の事例にもとづいた仮説だが、樺太においても妥当性を持つかどうかは、まだ判断の材料が不足している。樺太における家屋神と火神の主幣についての情報が不足しているため、検討は今後の課題したい。ただ、③のように、火神と家族神が本来無関係であると考えれば、鶴城や小田

²⁷ 脚注15参照。

寒の守護神が男女一組で存在することはそれほど無理なく理解できる²⁸。この場合、火神と家屋神が夫婦であるのかもしれないが、現状ではこれ以上の考察は難しい。本稿での考察は、ここまでとしたい。

参考文献

相賀徹夫(編著)

1985 『イヨマンテ iyomante 上川地方の熊送りの記録』 小学館。

アイヌ文化保存対策協議会編

1970 『アイヌ民族誌』 第一法規。

アイヌ民族博物館

1994 『伝承記録 山川 弘の伝承』。

1996 『樺太アイヌー児玉コレクション』(第11回企画展図録)。

1998 『公開シンポジウム アイヌのすまいでチセを考える』

2000 『伝承事業報告書 ポロチセの建築儀礼』

2002 『葛野辰次郎の伝承』。

青柳信克(編)

1982 『河野広道ノート民族誌篇1』 北海道出版企画センター。

池上良正ほか編

1998 『日本民俗宗教辞典』 東京堂出版。

石狩川中流域文化研究会(編)

2002 『ソラチウンクルの生活文化誌』 私家版。

石田収蔵

1987(1909) 「樺太アイヌの熊送」 日本人類学会編『東京人類学会雑誌』 24-274
第一書房。

犬飼哲夫・名取武光

1987(1939) 「イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(一)」『北方文化研究報告』
第1冊 思文閣出版。

1987(1940) 「イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(二)」『北方文化研究報告』
第2冊 思文閣出版。

内田祐一

1991 「帶広・伏古におけるチセと付属施設について」
『アイヌ民族博物館研究報告第2号』 アイヌ民族博物館。

²⁸ 北海道余市も、同じように考えることができるだろう。

1998 「チセの地域差—十勝アイヌを中心に—」

『公開シンポジウム アイヌのすまいチセを考える』アイヌ民族博物館。

梅原猛・高橋富雄 編

1984 『シンポジウム東北文化と日本』小学館。

SPb—アイヌプロジェクト調査団

1998 『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館。

大貫恵美子(OHNUKI-Tierney,Emiko)

1968 *A Northwest Coast Sakhalin Ainu World View*.Ph.D. dissertation,

Department of Anthropology,University of Wisconsin,Madison.

1984(1974) *The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin*.

Waveland Press, Inc.

荻原眞子・古原敏弘編

2002 『ロシア・アイヌ資料の総合的調査研究—極東博物館のアイヌ資料を中心として
Ainu Collections in Russia—』文部省科学研究費補助金 2000-2001 年度(基盤 A-1)
研究成果報告書 千葉大学文学部。

荻原眞子・古原敏弘・ヴァレンチーナ V.ゴルバチョーヴァ編

2007 『ロシア民俗学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館。

萱野茂

1978 『アイヌの民具』アイヌの民具刊行運動委員会。

1996 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂。

1985 『アイヌの神と自然』『イヨマンテ 上川地方の熊送りの記録』小学館。

北原次郎太

2002 「樺太アイヌの火神の祭壇」『ユーラシア言語文化論集』第 5 号 千葉大学ユーラシア言
語文化論講座。

2007 「樺太アイヌの木製品における刻印・人面の信仰的意義—事例と考察—」『アイヌ文化の
成立と変容—交易と交流を中心として—』法政大学国際日本学研究所「日本学の総合的
研究」研究プロジェクトテーマプロジェクト⑤「日本の異文化」研究成果報告書、
法政大学国際日本学研究所。

金田一京助・杉山寿栄男

1993(1942)『アイヌ藝術 木工編』北海道出版企画センター。

1993(1943)『アイヌ藝術 金工・漆器篇』北海道出版企画センター。

久保寺逸彦

1971 「沙流アイヌのイナウに就いて」『金田一博士米寿記念論集』 三省堂。

1977 『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店。

河野本道・谷澤尚一解説

1990 『蝦夷生計図説』 北海道出版企画センター。

齋藤玲子

2002 「更科源蔵氏『コタン探訪帳』の概要について-弟子屈町立図書館所蔵ノートの紹介-」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第11号。

栄栄吉(口述)秋田春蔵(筆録)栄貞蔵・萩中美枝(補足解説)

1978 「イノンノイタク(祈詞)」『アイヌ文化』第4号、財団法人アイヌ無形文化伝承保存会。

佐々木利和

1998 「東京国立博物館のアイヌ民族資料(下)」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第4号、北海道立アイヌ民族文化研究センター。

佐藤直太郎

1958 『釧路市立図書館叢書第4篇 釧路アイヌのイオマンデ』市立釧路図書館編。

更科源蔵

1933 「コタン夜話」「ドルメン」第2巻第8号、岡書院。

1968 『歴史と民俗 アイヌ』社会思想社。

1951 『コタン探訪帳』5、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

1953 『コタン探訪帳』8、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

1953-54 『コタン探訪帳』9、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

1955-56 『コタン探訪帳』10、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

1956-59 『コタン探訪帳』11、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

1959-61 『コタン探訪帳』12、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

1962-64 『コタン探訪帳』18、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

1965-70 『コタン探訪帳』19、弟子屈町立図書館所蔵(未公刊)。

杉山寿栄男

1975(1934) 『北の工藝』 北海道出版企画センター。

田中了編

1980 『資料館ジヤッカ・ドフニ展示作品集』 ウイルタ協会資料館運営委員会。

知里眞志保

1951 「知里眞志保遺稿ノート」No.214 北海道立図書館所蔵。

知里眞志保・米村喜男衛

1980(1958)「網走郷土博物館所蔵 土俗品解説」『北方郷土・民族誌』3、
北海道出版企画センター。

名取武光

1939 「北大付属博物館所蔵アイヌ土俗品解説 二」『ドルメン』第三巻第四号、岡書院。

- 1985 『アイヌの花矢と有翼酒箸』六興出版。
- 1987(1940)「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究報告』第2冊 思文閣出版。
- 1987(1941)「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」
『北方文化研究報告』第2冊 思文閣出版。
- 1987(1959)「樺太・千島のイナウとイトクバ」『北方文化研究報告』第7冊 思文閣出版。
- 鍋沢元蔵筆録 門別町郷土史研究会編
- 1966 『アイヌの祈り詞』門別町郷土史研究会。
- 難波琢雄・青木延広
- 2000 「沖の神(シャチ)とカムイギリ」『北海道の文化』72、北海道文化財保護協会。
ピウスツキ, B (PILSUDSKI, B)
- 1998a [On the bear festival of the Ainu on the island of Sakhalin]
The Collected Works of Bronislaw Pilsudski 1
The Aborigines of Sakhalin. MAJEWICZ, A. F.ed
- 1998b Materials for the study of the Ainu language and folklore.
The Collected Works of Bronislaw Pilsudski 2 MAJEWICZ, A. F.ed
- 1999a(1909) 「サハリン・アイヌの熊祭」 和田完訳。和田完編著 1999a 再録。
- 1999b(1909) 「サハリン・アイヌのシャーマニズム」 和田完訳。
和田完編著 1999a 再録。
- 1999c(1909) 「サハリンの原住民」 和田完訳。和田完編著 1999a 再録。
- 平田角兵
- 1981 「空知アイヌの生活誌」『北海道の文化』44 北海道文化財保護協会。
- 藤村久和・加藤篤美
- 1984 「アイヌの聖地と神まつり—十勝郡池田町のカムイエロキヒ」
『日本の神々—神社と聖地』第十二巻東北・北海道、白水社。
- 藤村久和・平川善祥・山田悟郎
- 1973a 『民族調査報告書 資料編Ⅰ』 北海道開拓記念館。
- 1973b 『民族調査報告書 資料編Ⅱ』 北海道開拓記念館。
- 1975 『民族調査報告書 総集編』 北海道開拓記念館。
- 藤村久和・若月亨編
- 1994 『ヘンケとアハチ』札幌テレビ放送株式会社 (STV)。
- 北海道開拓記念館
- 1981 『北海道開拓記念館収蔵資料分類目録—1 民族Ⅰ』。
- 1990 『更科源蔵資料目録』北海道開拓記念館一括資料目録 第22集
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編

- 1983 『昭和 57 年度アイヌ民俗文化財調査報告書』 II、北海道教育委員会。
- 1985 『昭和 59 年度アイヌ民俗文化財調査報告書』 IV、北海道教育委員会。
- 1986 『昭和 60 年度アイヌ民俗文化財調査報告書』 V、北海道教育委員会。
- 1992 『平成 3 年度アイヌ民俗文化財調査報告書』 X I、北海道教育委員会。
- 1993 『平成 4 年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズVI アイヌのくらしと言葉 3』 北海道教育委員会。
- 1995 『平成 6 年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズVII アイヌのくらしと言葉 4』 北海道教育委員会。
- 1997 『平成 8 年度アイヌ民俗文化財調査報告書』 XVI、北海道教育委員会。
- 1998 『平成 9 年度アイヌ民俗文化財調査報告書』 XVII、北海道教育委員会。

山本祐弘

- 1970 『樺太アイヌ・住居と民具』 相模書房。

吉田巖

- 1984(1953) 「古稀談叢一十勝アイヌ十一故老の談話記録一」

『吉田巖著作篇(三)民族学研究篇』(河野本道編『アイヌ史資料集資料編』第 2 期第 3 卷)
北海道出版企画センター。

- 1984(1956) 「杖のみたま一十勝アイヌ故老談話記録一」

『吉田巖著作篇(三)民族学研究篇』(河野本道編『アイヌ史資料集資料編』第 2 期第 3 卷)
北海道出版企画センター。

米村喜男衛

- 1981(1937) 「北見アイヌ人」『北方郷土・民族誌』 1、北海道出版企画センター。

和田完

- 1987(1958) 「南樺太土着民における偶像」『北方文化研究報告』第 7 冊 思文閣出版。

- 1987(1959) 「樺太アイヌの偶像」『北方文化研究報告』第 7 冊 思文閣出版。

- 1999b(1959) 「サハリン・アイヌの偶像」和田完編著 1999a 再録。

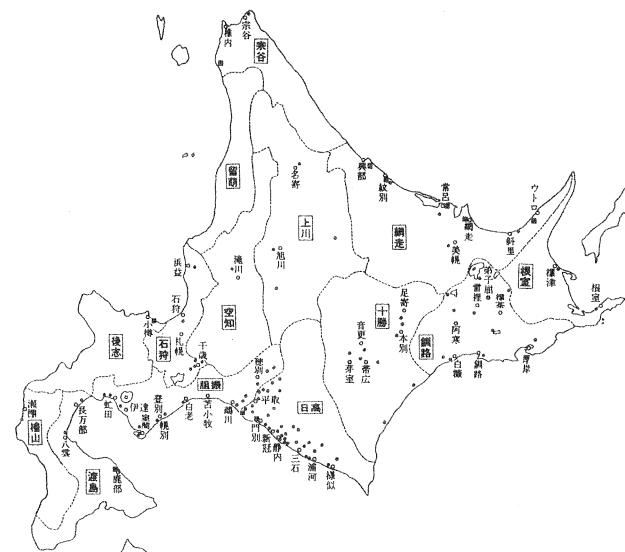
Neil Gordon Munro

- 1996(1962) 『AINU CREED AND CULT』 THE KEGAN PAUL JAPAN LIBRALY vol.4
B.Z.Seligman(ed.) , Kegan Paul International.

(きたはら じろうた・アイヌ民族博物館学芸員)



南樺太関連地名分布図



北海道関連地名分布図 [更科 1968]をもとに一部変更

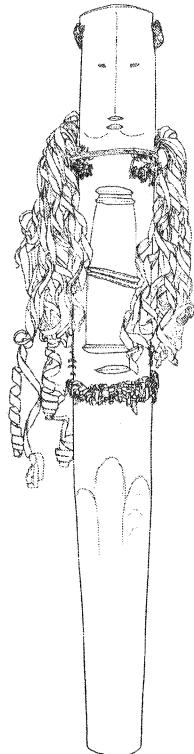


図1 記89515-1 鶴城 L56.5cm W6cm 図2 記89515-2 鶴城 L54.5cm W6cm

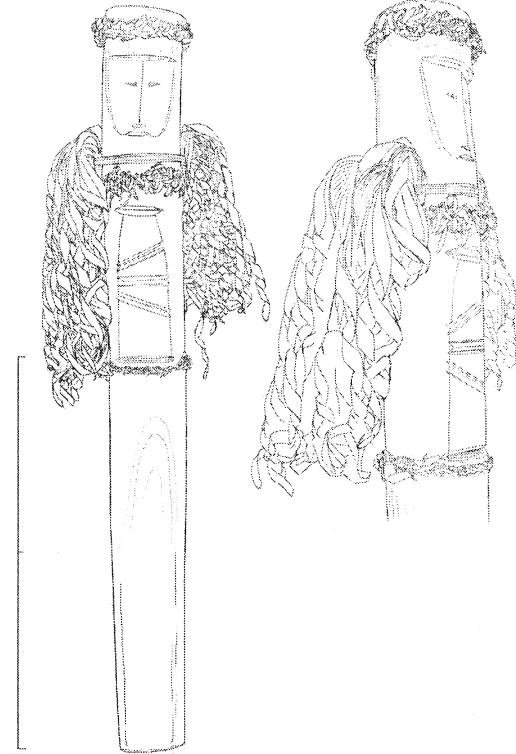


図2 記89515-2 鶴城 L54.5cm W6cm

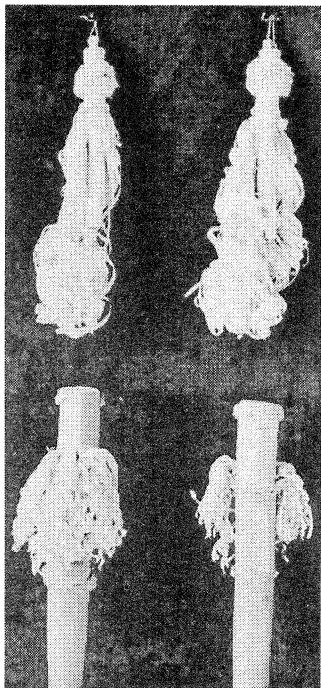


図3 鶴城の家族神の配置
(撮影更科 弟子屈町図書館蔵)

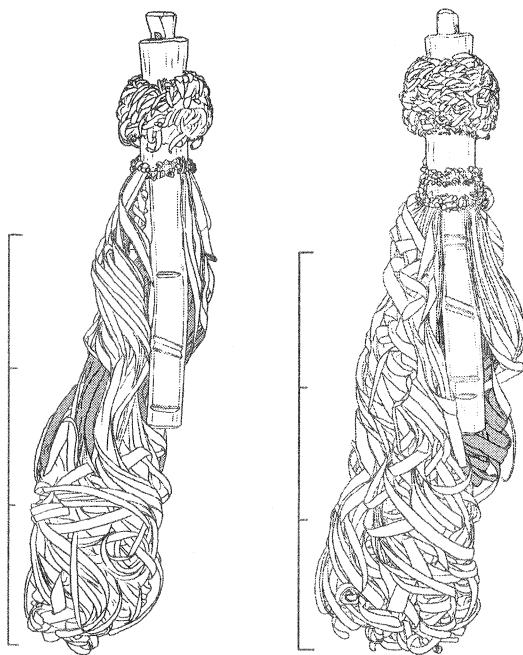


図4 記 89519 鶴城
L28.5cm W3.1cm

図5 記 89518 鶴城
L29cm W3.4cm

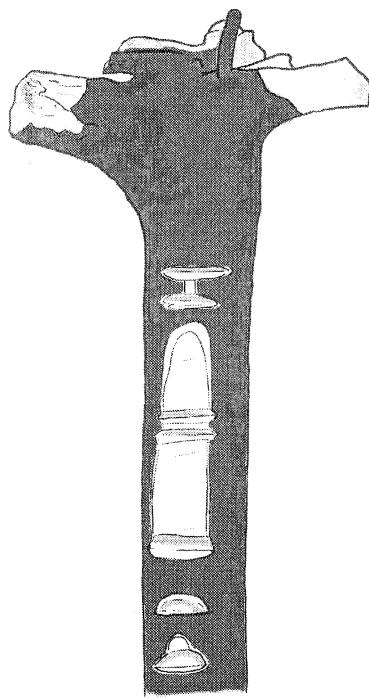


図6 来知志の逆木守護神 サ S-7 により作図

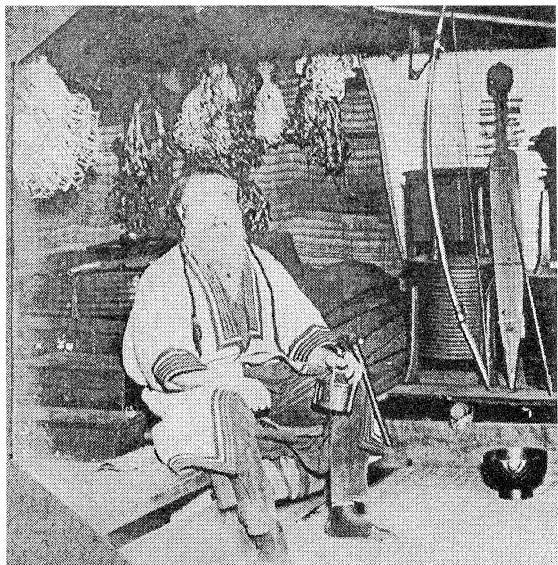


図7 来知志の宝壇と木幣

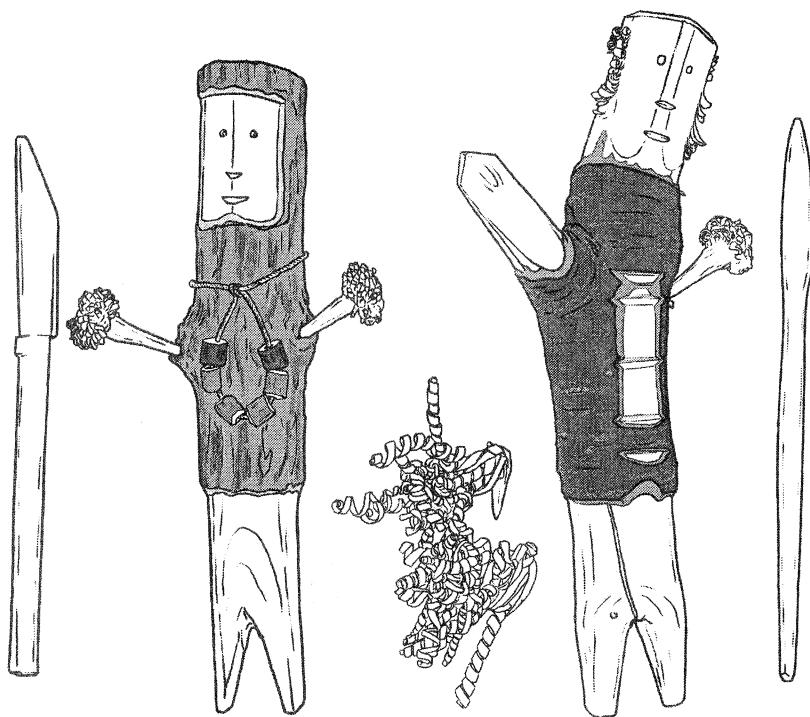


図8 来知志の「カマド神」 南山大学人類学博物館収藏

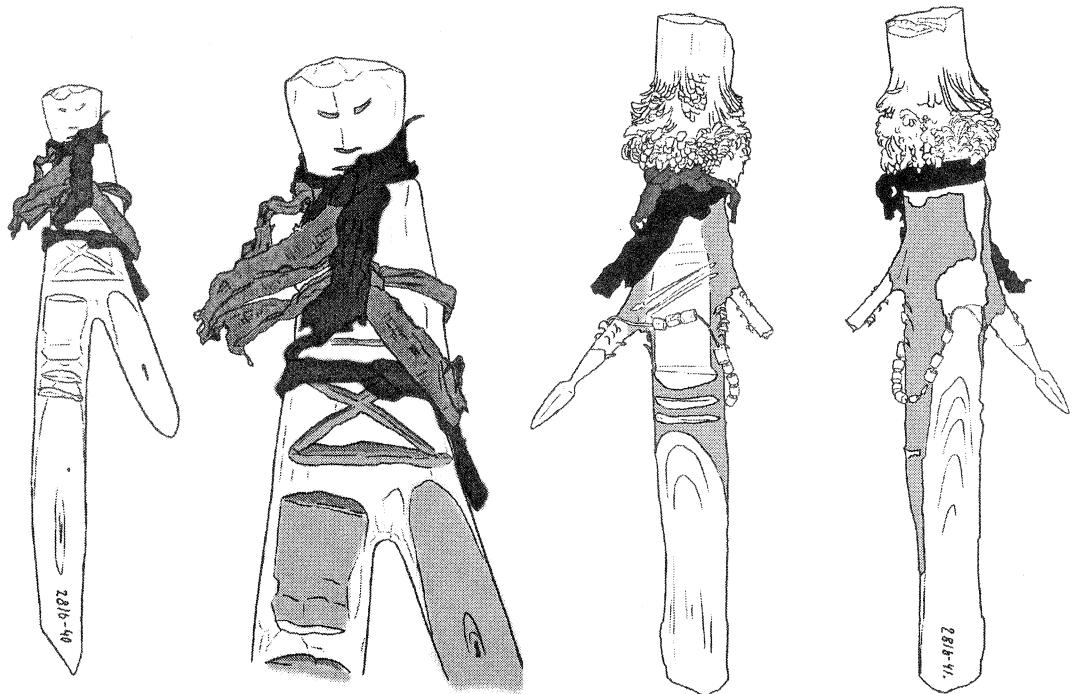


図9 REM2816-40 小田寒 L38.5cm W4.3cm

図10 REM2816-41ab 小田寒 L46.2cm W5.2cm

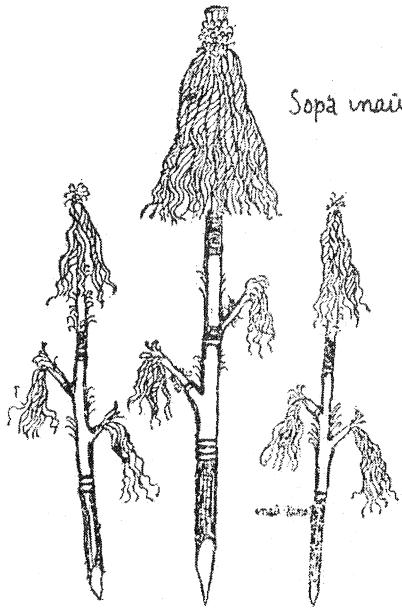


図 11 白浦 山本(1970)p145 より

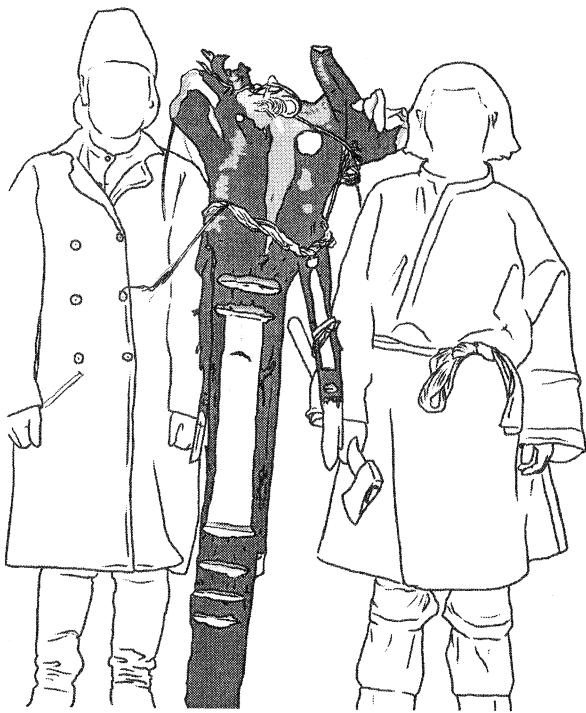


図 12 大谷(タコエ)村の逆木を使った守護神
REM2448-27 により作図



図 13 ナナイの逆木を使った偶像
ハバロフスク州立郷土史博物館常設展示より

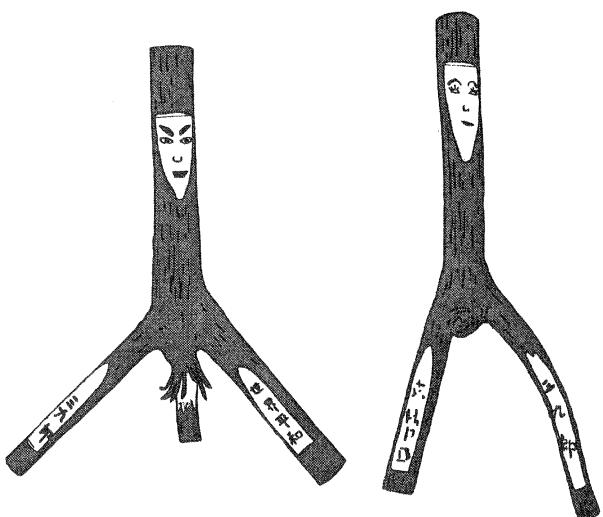


図 14 長野県の木偶サンクロウ
神野(1996)p382 掲載写真より作図

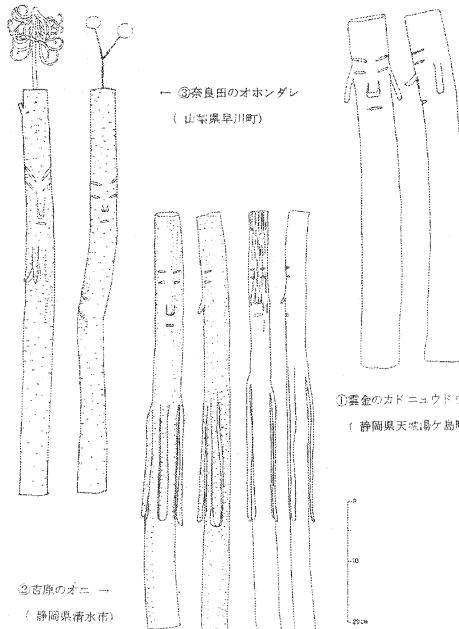


図 15 本州各地の木偶 神野(1996)p361 より
山梨県(左) 静岡県(中央・右)

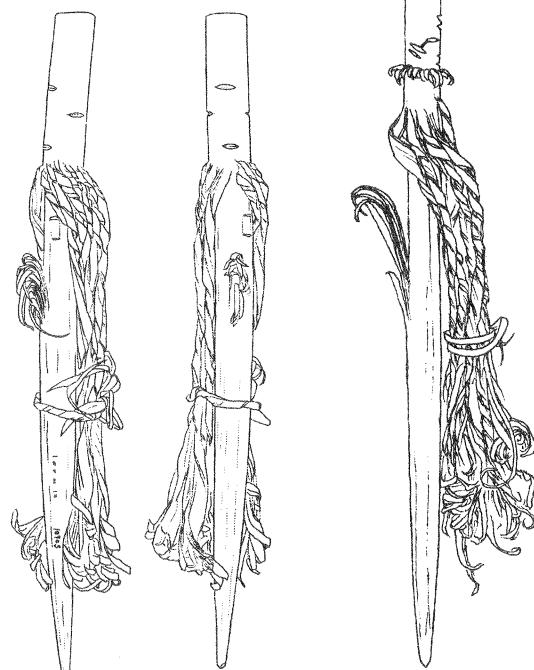
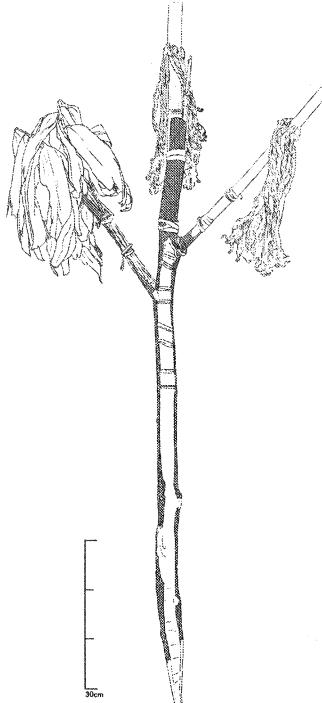
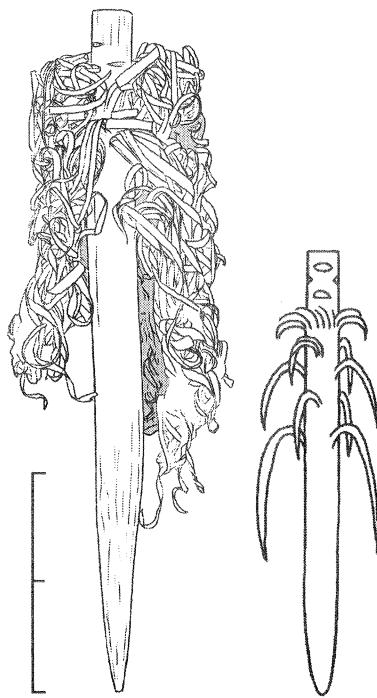


図 16 北 10705 新十津川
L49.5cm W3.11cm

図 17 北 10698 新十津川
L47cm W2.51cm



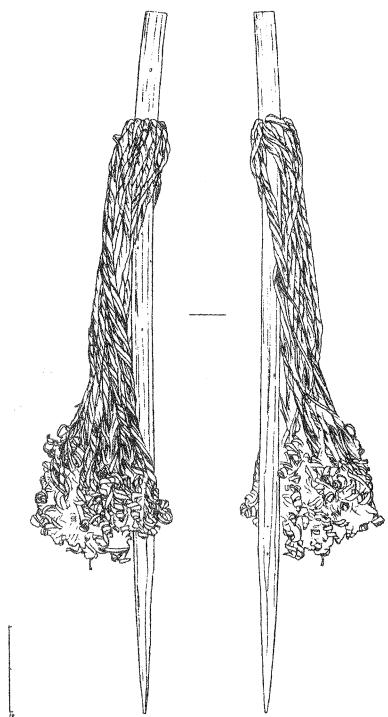


図 20 紫雲古津 白 75005 L82cm W2.55cm

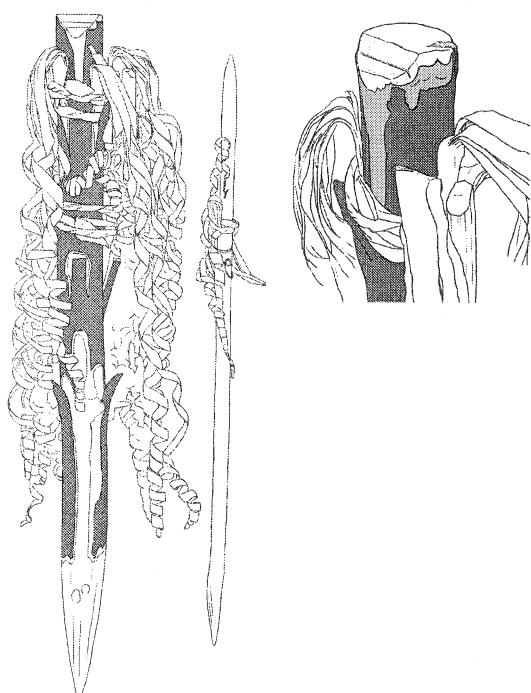


図 21 記 89460 門別 L42cm W2.8cm

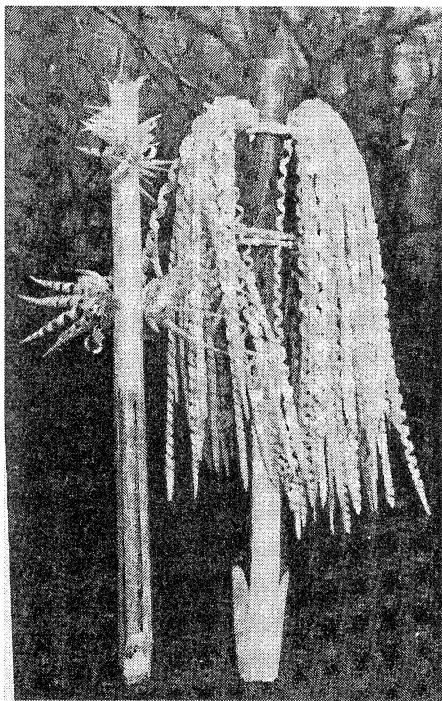


図 22 二風谷の家族神 久保寺(1971)より



図 23 二風谷の守護神 久保寺(1971)より



図 24 記 89480 浦河 L59cm W2.8cm

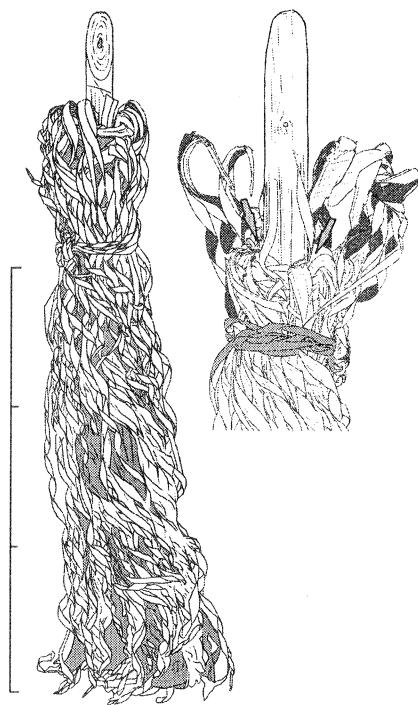


図 25 記 89471 浦河 L46cm W2.1cm

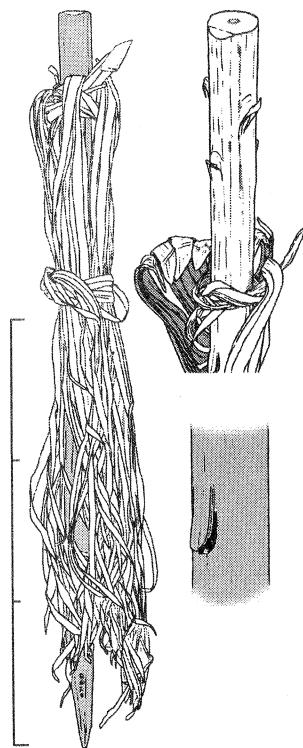


図 26 記 89472 浦河 L51cm W2.8cm

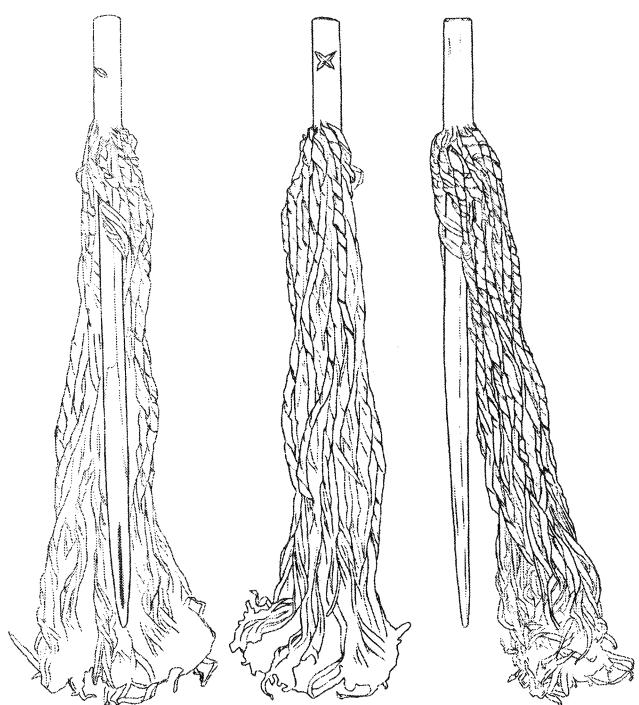


図 27 北 10758 伏古 L56 cm W2cm

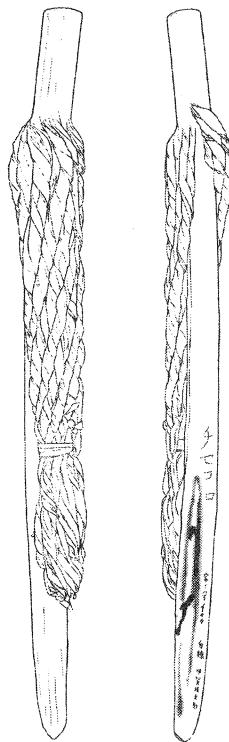


図 28 記 89482 白糠 L56.3cm W2.6cm



図 29 民 H33417 鎧路 L58.1cm 32.8cm

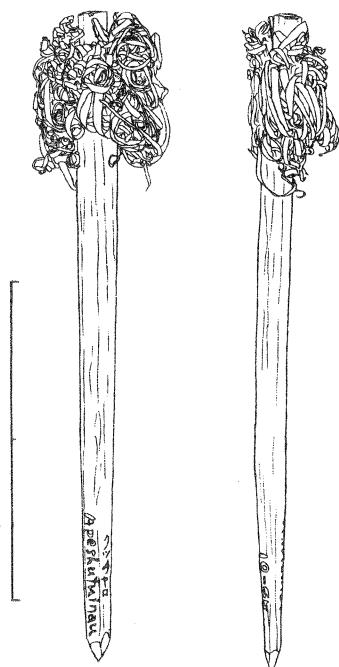


図 30 旭 4050 屈斜路
L20.5cm W1.2cm

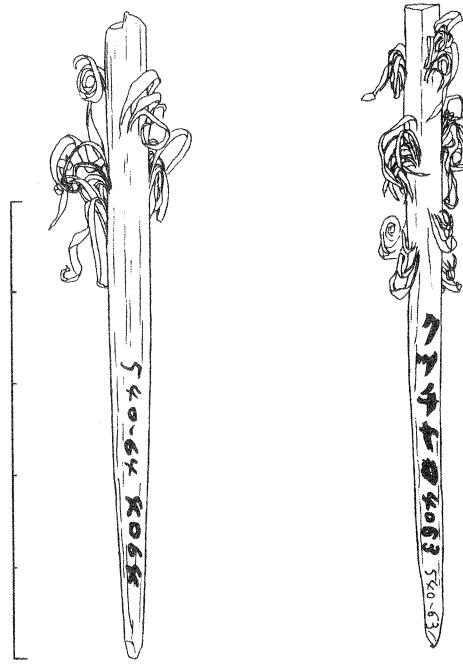


図 31 旭 4064 屈斜路
L7cm W0.45cm

図 32 旭 4063 屈斜路
L8.8cm W0.48cm

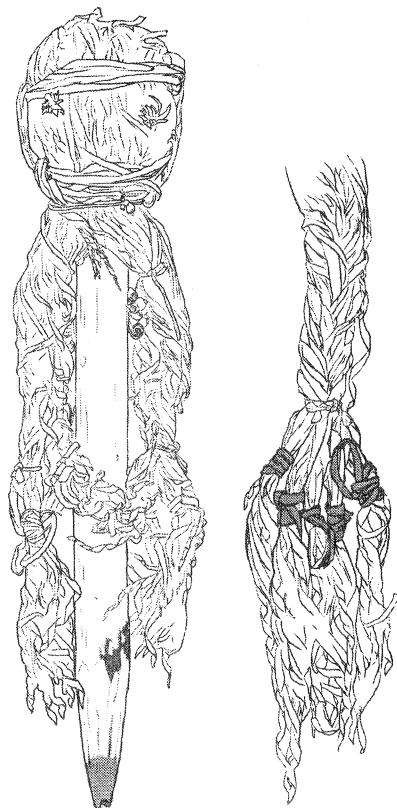


図 33 記 89492 阿寒 L52cm W3.3cm



図 34 旭 7208 美幌 L14.2cm W1.1cm

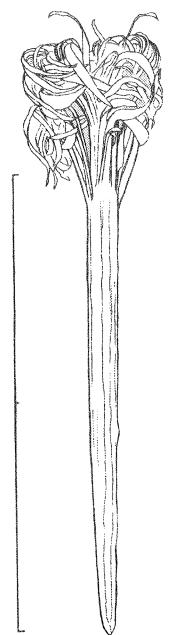


図 35 旭 7209 美幌 L12.5cm W0.65cm

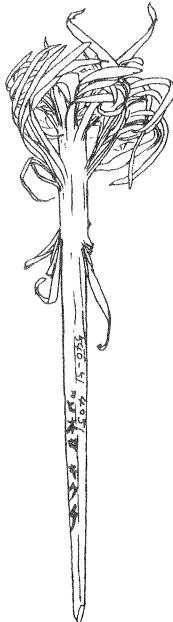


図 36 旭 4051 美幌 L12.5cm W0.6cm

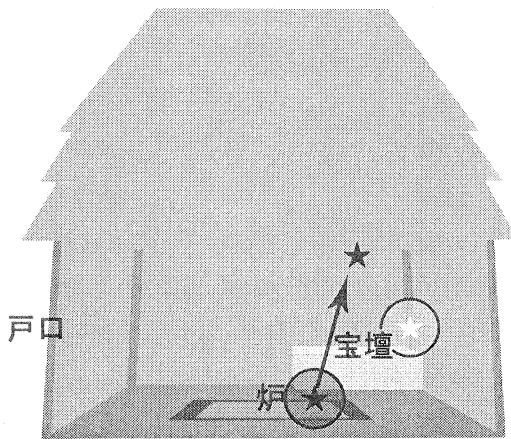


図 37 沙流など

- ☆家族神(火神の夫)
- ★宝壇の木幣(火神の主幣→家屋神へ)
- *火神は女性

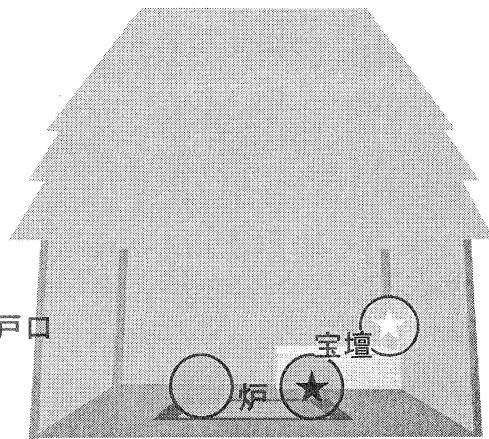


図 38 鋤路など

- ☆家長の守護神
- ★火神の主幣
- *火神は男女とも炉中

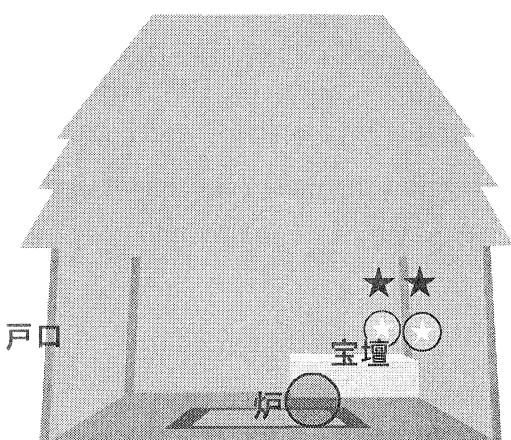


図 39 鶴城・小田寒など

- ☆家族神(夫婦)
- ★宝壇の木幣(家族神へ)
- *火神は女性 伴侶・主幣の位置は不明

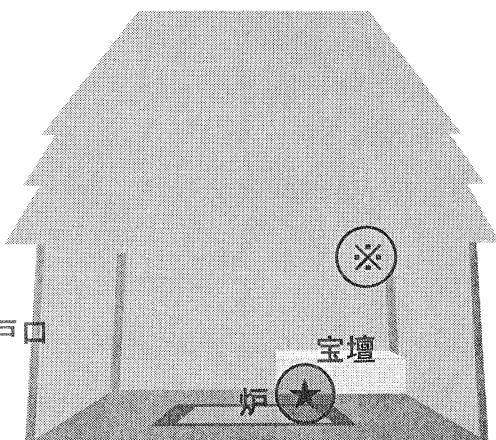


図 40 十勝音更・伏古など

- ※宝壇の木幣(男の火神へ)
- ★火神の主幣
- *火神の女性は炉中、男性は宝壇の上

Several Notes on the Female Fire Deity and her husband

KITAHARA jirota

Summary:

Recently, the author has researched into *kamuy*(deity) and *inaw* (offering to the deities). Until now, *apekamuy*(fire deity) has been regarded as the most important female deity, and her husband is *cisekorkamuy*(guardian of the house). He resides at the sacred corner of the house. However, according to ethnographic research on east hokkaido Ainu, the fire deity is a couple namely *apeuciekasi*(fire-male-deity) and *apeucihuci*(fire-female-deity), and they reside in the hearth. This important difference has been overlooked by many previous researchers.

The author's aim in this paper is to arrange and verify how the firedeity and guardian of the house appear in ethnography on whole district of hokkaido and sakhalin and ethnological materials which collected by many previous researchers.

As the result of author's investigation, the style of guardian differ with district and sometimes the guardian can't be found in several districts. The author saw most interest date in the Tokachi district. In the Tokachi, the fire deity is a couple, and the female deity resides in the hearth, but the male deity resides at the sacred corner and he has been regarded as same deity to *cisekamuy*(deity of the house).